

ドラゴンボール外伝

沢渡限

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは本編では描かれていない、ひよつとしたらあったかもしれないドラゴンボールのサイドストーリー。

目次

ヤジロベーとカリン様の決死の作戦!!

73

ウーブの師匠はあの男!! 孫悟空と28

年ぶりの再会 | 1

サタン世界チャンピオンへの道!! 第2

4回天下一武道会〜前編〜 | 16

サタン世界チャンピオンへの道!! 第2

4回天下一武道会〜後編〜 | 30

絶望への反抗!! 誇り高きサイヤ人の王

子、ベジータの最期!! | 41

絶望への反抗!! 悟飯にすべてを託し

て、ピッコロとクリリンの最期の戦い!!

53

絶望への反抗!! 最後の仙豆を届けよ、

絶望への反抗!! 悟飯と武天老師の決意

87

絶望への反抗!! 希望の種 | 104

絶望への反抗!! 受け継がれし戦士たち | 122

ウーブの師匠はあの男!! 孫悟空と28年ぶりの再会

それは後にドラゴンボールによって人々の記憶から消去され、一部の関係者を除いて誰からも忘れられてしまった、この世の命運を賭けた大決戦だった。

「おめえはすげえよ……たった一人で」

遙か太古たいこの昔、魔導師ビビディによって生み出され、その息子であるバビディによって復活した最強の魔人ブウ。

何度も何度も姿を変えて、途方もない強さで悟空達を苦しめてきた。

「何度も姿を変えて……いい加減嫌になっちまうくれえにな」

そんな強敵魔人ブウとの決戦に、ピリオドが打たれようとしていた。

「今度はいいヤツに生まれ変われよ。1対1で勝負がしてえ、待ってっからな」

地球人全ての元気が込められた、特大の元気玉。

かつてサイヤ人との戦いに備え、界王様もとの下で修行した時に習得した必殺技を、悟空は魔人ブウにぶつけていた。

かめはめ波よりも、スーパーサイヤ人3よりも、何よりも強力なとっておきの技。

「またな」

外を堂々と歩けるようになった。

こうしてこの戦いは誰の記憶にも残らない、伝説の戦いとなったのである。

「悟空のヤツ、あつぱれだな。これはワシからのプレゼントだ……楽しみしておくのだ」

さらにしばらくして、閻魔大王の純いさな計らいによってミラクルな事が起きた。

「おぎゃあ!! おぎゃあ!!」

悟空達が暮らすパオズ山からも、ブルマやベジータ達が暮らす西の都からも遠く離れた辺境の村にて、一人の男の子が産声をあげた。

その男の子はなんと、あの魔人ブウの生まれ変わりだった。

男の子はウーブと名付けられ、辺境の村ですくすくと育っていった。

ウーブが4歳になった頃だった。

「ウーブ君をこのワシの弟子にさせてもらえんかね?」

老齢に達しながら筋骨隆々とした肉体を持ち主が、ウーブの生家を訪ねていた。

「ええ、うちの子を弟子に……ですか?」

「このあいだの幼稚園での孫との喧嘩、聞き及びましてな、ウーブ君には才能がある。ウーブ君はきつと素晴らしい武道家になれるとワシは思うのだ」

頭髮は全て白髪で、顔は皺しわだらけだが、その肉体だけは全盛期を維持し続けている。

「どこかの修行僧のような風貌の老人が、ウーブの母親を説得しようとしていた。

「我が孫^まがウーブ君をイジメた事がキツカケゆえ、そのケジメもつきたい。どうかかな？」

「まあ、天下一武道会で優勝したあなたが仰られるのなら……」

「このチャパ王、必ずやウーブ君を世界に誇れる武道家に育て上げましょう」

それはかつて参加した天下一武道会において、ただの一度も掠られずに優勝を果たすも、その後の大会では二度も悟空と戦い、そして敗れた悲劇の武道家・チャパ王その人だった。

チャパ王は第23回天下一武道会の予選で悟空に破れて以降、イチから出直すつもりで修練を重ねてきた。そして長い修行の旅の末^{すえ}、下山したのはセルゲームの頃だった。

そこでチャパ王はテレビ中継を見たのだ。

——あの男はッ!!

中継では散々コケにされていた金髪の男。

しかしチャパ王はその正体にイチ早く気付いたのだ。

——間違いない、孫悟空だ。

二度も自分に煮え湯を飲ませたその男の顔を、たとえば髪型が変わろうが目の色が変わろうが見間違はずがない。

そして中継を見て、チャパ王は絶望したのだった。

この時、チャパ王の戦闘力は長い修行の末、180程度になっていた。

これ第22回天下一武道会における、悟空や天津飯と同等レベルである。

しかしセルゲームで見せた悟空やその息子、悟飯の強さは世界そのものが違った。

悟空ヘリベンジを果たすべく修行を重ねてきた身ながら、そのレベルの差は最早埋められるものではないことを実感させられた。

それからチャパ王は村へ戻ったのだ。

自分も、もはや歳である。

自分には、才能がないことを思い知らされた。

ゆえに自分がやるべきことは一つしかない——後進の育成に専念することであると。

そう気づいたチャパ王は村へ戻り、村の子供たちに武術を教える事にした。

「腐敗した武道界を、ワシの門弟^{もんでい}たちが正^{ただ}してくれることを祈る」

武術の達人であるチャパ王は気づいていた。

ミスター・サタンが弱いことに。25回大会で準優勝となった18号との試合も、直近で行われたミスター・ブウとの試合も、全て八百長であることに。

根っからの武道家であるチャパ王は、それが許せなかった。

とはいえ、ミスター・サタンも常人のレベルでは決して弱いわけではない。

それにミスター・サタンには恐るべき相棒、ミスター・ブウが存在すること。

このミスターブウに勝てる可能性を秘めた人材——そう彼が見抜いたのがウーブだった。

——それからさらに6年後、魔人ブウとの戦いから10年後。

「遠慮はいらん。かかってきなさい、ウーブ君」

「はい、お師匠様……ッ!!」

ウーブのとてつもない突撃を、チャパ王は間一髪でかわす。

「はあ!!」

「くう……っ!?!」

瞬く間に放たれたウーブの飛び蹴りを、どうにか受け流しながらチャパ王は後ろへ跳躍し、ウーブとの間合いをとった。

(やはりパワーではとっくの昔に、このワシを上回っている!!)

冷や汗ダラダラ。

何年も前から感じ取っていたことだが、完全にウーブはチャパ王の実力を上回っていた。

チャパ王がウーブに対して勝っているのは、長い経験のみ。

「本気で行くぞ!! 受けてみよ——我がはっしゅけん八手拳を!!」

八手拳、それはあまりの速さに腕が8本にも見えるというチャパ王の必殺技。

ウーブとの間合いを一瞬で詰めて、チャパ王は渾身の拳技けんぎをウーブに浴びせる。

しかしチャパ王の八手拳をウーブは全て躲してしまい、一発も拳はウーブに届かない。

「はっ!!」

チャパ王の八手拳の欠点、それは足元がお留守になってしまうこと。

ウーブは即座に姿勢を低くし、下段の足払いでチャパ王をこけさせた。

「はあああああああっ!!」

そしてウーブは立ち上がり、チャパ王に飛びかかって、その拳をチャパ王の鼻先で寸止めた。

(見事な一本だ。見えなかった……このワシの目には……ッ!!)

チャパ王の全身から力が抜けた。

武術的な脱力ではなく、戦意の喪失も含めた真なる意味での脱力。

「ワシの完敗じゃ……」

「お、お師匠様、大丈夫ですか?」

「フッフ、ワシは嬉しいぞ。おぬしの拳速けんそくはあの男を上回っていた」

チャパ王の脳裏には、孫悟空の姿が浮かんでいた。

忘れもしない、自分が太刀打ちできなかつた若き戦士。

「あの男?」

「昔の話だよ。そうだ、ウーブ君。まもなくだが、天下一武道会が開催される。そろそろ君も出場してはどうかかな?」

今のウーブなら孫悟空はもちろん、ミスターブウには勝てないかもしれない。

しかしきつといい線は行くはず。

自身との組手の経験しかないウーブにとって、ミスターブウとの試合はきつと素晴らしい経験になるに違いない。

チャパ王はそう思い、ウーブの出場を勧めた。

「天下一武道会って、あの天下一武道会ですか?」

「左様。このワシもかつて参加した、あの天下一武道会だ」

「……けど、オイラなんか出ても」

「何を言っておる。このワシはかつて、あの天下一武道会の優勝経験者だ。そのワシをウーブ君は全く苦勞することなく、簡単に倒してのけている。君はワシのお墨付きだ、よい修行と思って参加してみるといい」

チャパ王は、体で理解していた。

もはやウーブは自分の手には置けない存在。

もうとつくに自分が通用するレベルを超越してしまっていることに。

だからこそウーブにはウーブ以上の強者との戦いが必要だと、チャパ王は考えていた。

「それに天下一武道会で優勝すれば賞金が貰える。パパとママを楽にしてあげられるぞ」

「お師匠様……わかりました。オイラ、天下一武道会に出てみるよ」

「その心意気だ」

目を輝かせるウーブの姿に、チャパ王は思わず微笑んだ。



——それから瞬く間に時は経って、第28回天下一武道会が開催された。

ウーブは両親に付き添われ、天下一武道会の会場へと向かった。

チャパ王は弟子たちへ稽古をつけたあと、ウーブの戦いぶりを見るためにテレビをつけた。

「ほう、やはり予選は軽々と突破したか」

参加選手の中にウーブがいることを知り、チャパ王から笑みが零れる。

幼い頃から才能を確信し、自分が教えられることの全てを伝えた弟子の晴れ舞台。

しかしチャパ王の笑みは、途端に驚きへと変貌する。

「こ、この男は……ッ!!」

忘れもしない、独特な髪型をしたあの男。

なんと孫悟空が、今回の天下一武道会に参加していたのだ。

「どうされたんですか、チャパ王?」

「フッフ、ワシの弟子とワシの因縁の相手か……これは面白くなってきた」

対戦カードが決まった。

ウーブの対戦相手は、あの孫悟空だった。

経験不足なウーブが勝てる可能性は低いだろうが、ウーブの秘めたパワーはチャパ王

自身も把握しきれないほどに膨大である。

孫悟空が相手なら、ウーブが秘めた力を全て解放できるだろう。

その力が解放された時、きつと孫悟空はビビるだろうと、チャパ王は期待に胸を膨ら

ませた。

そしてチャパ王の読みは、まさしく正解だった――。

『お父さんも、お母さんも、ウンコタレじゃなああ……ッ!!』

ウーブの蹴りを受け止めた悟空は、その腕が痺れた様子だった。

そしてその隙にウーブは悟空に強烈な突きを放ち、悟空は衝撃でぶっ飛ばされてしまった。

「ちや、チャパ王……ウーブ君って、あんなに強かった……でしたっけ？」

「ふ、フフフ……はぁーっはははははははははは!!」

「チャパ王!」

「いigo孫悟空。目覚めさせるのだ……ウーブ君に秘められた本当の力を!!」

テレビに向かってチャパ王は、高らかな笑い声をあげた。

『ワクワクしてくるぜ……間違いねえ、おめえは悪のブウの生まれ変わりだ!!』

『はあああああああああッ!!』

それからウーブと悟空の激闘は続いた。

「信じられん。戦いの中で、戦い方を学んでやがる」

その戦いぶりはベジータが。

「う、ウソだろ!」

「なんだあの子は!」

「信じられない!!」

「ひよっとして孫くんが言っていたすごいヤツって、あの子のことなの!」

クリリンが、悟飯が、ビーデルが、そしてブルマもウーブの強さに驚愕していた。ウーブは悟空との戦いを通して、さらに戦闘力を増していく。

悟空とウーブの戦いはさらに激しさを増して、文字通りの激闘となっていく。

——だが、勝負は意外にも呆気なく終わった。

激しい戦いの末、武舞台が崩壊してしまったのだ。

そしてウーブは落ちてしまいそうになった。

『そうか、おめえまだ空の飛び方の知らねえんか』

しかし寸前のところで悟空がそれを助けた。

『こんな風に戦ったのは初めてなんだろう？ オラがこれからおめえん家ちと一緒に住んで

おめえに戦い方を教えてやる。な、いいだろう？』

そのやり取りは、すべてテレビで中継されていた。

当然、それを見ていたチャパ王の耳にも入った。

「……」客人だ、招き入れる準備をしろ」

「え？ は、はい!!」

チャパ王は静かに立ち上がり、弟子にそう指示をした。

それから悟空がウーブの村へ到着するのには、小一時間もかからなかった。

「あの、悟空さん。オイラちよつと寄りたいたいところがあつて……」

「寄りてーとこ？」

「はい。オイラに武道を教えてくれたお師匠様のところに……あ、ここが道場です!!」
村の中でも寺に次いで大きな施設。

この村を中心に、周辺から弟子たちが集まり、大きくなったチャパ王の道場である。
「よくぞ来てくれた。歓迎するぞ……孫悟空」

建物の中から出てきた老齢の男に名前を呼ばれ、悟空は反応した。

（なんだこいつは。チチや牛魔王のおつちゃんよりずっと気がでけーぞ？）

悟空からしてみれば大した実力ではないのだが、その気の大きさは亀仙人をして達人と言わしめるチチを遥かに上回るものだった。

それにどこか、見覚えのある風貌をしていた。

「お、おめえは……」

「貴様とはかつて天下一武道会の予選で二度、戦ったことがある」

「……………あああ……………ツ!! 思い出した、おめえひよつとしてチャパ王か!!」

「如何にも、ワシがああのチャパ王だ」

「ひゃあーっ!! おつでれーたあ!! 懐かしいなあー、おめえすっかりじいちゃんだな!!」

「貴様が変わらなすぎなのだ。いくらあの時少年だったとはいえ、もう何十年も前の話だというのにな……」

チャパ王にとって、悟空への敗北はまるで昨日のこのようであったが、時の流れと
いうものは残酷であり、既に第23回天下一武道会からは28年が経過していた。

「お師匠様。悟空さんとお知り合いなんですか?」

「如何にも。この男だ、このワシを二度も破った者は」

「お、お師匠様!! 悟空さんと戦ったことがあったんですか!」

「30年近く前の話だな」

「そっか。おめえがウーブに拳法教えてたんだな」

「最もワシの指導より、貴様との戦いでウーブ君は真の力に目覚めたようだな」

自分の無力さを痛感しつつも、チャパ王は安堵のため息を吐いた。

ウーブがさらなる高みに達するためには、もはや自分では力不足である。

しかしこの孫悟空ならば、きつとウーブを最強の拳法家に育て上げられるだろうと確
信した。

「ウーブ君はワシが達成できなかつた最強の男を目指せる逸材、ワシにとってウーブ君
は夢そのものなのだ。孫悟空よ、このワシに代わってウーブ君の指導を願えるか?」

まさか悟空に頭を下げる日がくるとは、チャパ王も思っていなかつたことだ。

しかしウーブの成長のために、チャパ王は深々と悟空に頭を下げたのだった。

「頭上げてくれよ。オラ元々そのつもりで来たんだ」

「左様か？」

「ああ、任せてくれ!! どんなやつにも負けねーすげえヤツにするからよ!!」

「まさかあの少年が人にモノを教える立場になろうとは……フツ、これでワシも肩の荷が下りた」

かつて最強だった男から、現在最強の男に受け継がれた意志。

自分の役目は終わった。

しかしこれまでで一番、誇らしい気分にはチャパ王はなっていた。

自分がどれほど努力しても勝てなかった孫悟空に、自分の門弟が肉薄し、その孫悟空から指導を受ければウーブはさらなる高みに達することができるだろう。

ひよつとしたら、悟空を超える武道家になれるかもしれない。

これから先、ウーブは悟空たちと共に地球を救う戦士となるが、それはまた別のお話
|。

サタン世界チャンピオンへの道!! 第24回天下一武道会～前編～

天下一武道会。

それはこの世界で行われている3つの武道大会の中でも、特にハイレベルと言われている世界的かつ由緒正しい武道大会であった。

天下一武道会はそのレベルの高さゆえ、優勝者は全員が達人であった。

地獄からの使者、アックマンが過去に二度優勝。さらには当時、その圧倒的な強さから畏怖いふされていたチャパ王が、ただの一度もかすられることなく優勝を果たしている。

そして第21回天下一武道会。

孫悟空との激闘の末、優勝したのは武天老師が変装したジャッキー・チュンだった。続く第22回天下一武道会では、天津飯が鼻の差で悟空に勝利し、優勝。

第23回天下一武道会では孫悟空とピッコロの大決戦の末、悟空が初優勝を果たした。

——これ以降、天下一武道会は10年以上も開催されることはなかった。理由は単純。

天下一武道会の会場があるパイア島が、ピッコロの超爆裂魔波ちようばくれつまはによって、全ての建物が消し飛んでしまったからである。

その復興に10年の歳月がかかってしまったが、エイジ767年、遂に第24回天下一武道会が開催されることになった。

「皆様、大変お待たせいたしました!! 天下一武道会が11年ぶりに復活!!」

金髪にサングラスのスーツ姿の、中年に差し掛かろうとする男。

あの名物アナウンサーも引き続き、審判を兼任して続投することになった。

「皆様、11年前の戦いを覚えているでしょうか? 孫悟空選手vsマジニア選手の会場一帯を吹き飛ばすほどの激闘を制し、天下一を取ったのは孫悟空選手!! 今大会には残念ながら出場されていませんが、果たしてあの時の感動を超える戦いがあるのか、私は非常に楽しみです!!」

11年も経つと、人々の記憶から悟空たちは忘れ去られてしまっていた。

第23回天下一武道会でマジニアがピッコロ大魔王の生まれ変わりだと判明し、観客の大半が逃げてしまったことも大きく影響しているだろう。

悟空とピッコロの戦いは、テレビでも途中までしか放映されていなかった。

だから会場の観客たちは誰一人として悟空達を知らない。

しかし悟空達を長年、間近で見っていたこのアナウンサーの記憶には、あの戦いの記憶

が鮮明に残っていた。

だからなのか、彼は内心、今大会にはさほどの期待を持っていなかった。

「ミスターサタン選手対スポポビッチ選手!!」

両雄りょうゆうが武舞台上に上がる。

カーリーヘアのアクションスターのような風貌の男と、赤茶髪のロンゲの巨漢だった。

「ご存知ミスターサタン選手は天下一武道会以外の二つの世界選手権で優勝経験があります、注目の強豪選手です!! 対するスポポビッチ選手は格闘技界期待の新人。どちらも今大会が初出場、注目の対決です!!」

第24回天下一武道会は8名によるトーナメント制。

その第一試合に上がったのは、後に世界の救世主となるあの男だった。

「スポポビッチ君、残念だが君は私には勝てない」

人差し指を振りながら、ミスターサタンはスポポビッチを挑発する。

「なにを、ふざけんな!!」

挑発で怒り狂ったスポポビッチは、ミスターサタンに突撃して殴りかかる。

凄まじい殴打の連撃だったが、サタンはそれを全て軽々と躲した。

「おらあ!! ……うわあっっ」

渾身の力を込めた大振りのパンチだったが、ミスターサタンは華麗に宙を舞ってスポポビツチの攻撃を避けたため、空振りで勢い余ったスポポビツチは前のめりに倒れ込んでしまう。

「スポポビツチ選手、凄まじい猛攻でしたが、サタン選手はそれを全て避けてしまいました!!」

「くっそお……」

「とりやあああああ————ッ!!」

掛け声と共に、ミスターサタンは大きく飛び上がった。

胴廻し回転蹴り。それは空手における大技であり、転倒のダメージが残るスポポビツチを仕留めるには威力抜群の絶好の大技であった。

慌てて振り返るスポポビツチだったが、反応が間に合わず、後頭部にモロにサタンの蹴りを食らってしまった。

武舞台に沈むスポポビツチ。

起き上がることはできなかつた。

「……9……10!! ミスターサタン選手の勝ちです!!」

「うおおおおおおお——ッ!!」

「格闘王の強さは本物でした!! 強——い!! ミスターサタン選手、アツサリとス

ポポビッチ選手を下してしまいました!!」

高らかに雄たけびを上げ続けるミスターサタン。

まさか7年後の第25回大会で、スポポビッチが愛娘を執拗に痛めつけてしまうことなど、この時のサタンは知る由もなかった。

「ミスターサタンか……流石だな」

「あのスポポビッチをアツサリ倒すとは、優勝候補の一人だろうな」

そうサタンの戦闘力を推測する長い金髪の端正な容姿の男と、鍛え抜かれた肉体を持つ黒人。

それは後の第25回大会にも参加する、ジュエルとキーラであった。

「さあて、第二回戦の始まりだぜ？」

「俺の出番だな……これに勝ってミスターサタンに挑戦してみたいものだぜ」

武者震いをしながら拳を叩き合わせて、キーラは武舞台へと向かった。

「まもなく第2試合が始まります。キーラ選手対ウパ選手」

キーラと対峙するのは、民族衣装に身を纏った褐色肌の若き青年。

長い黒髪を後ろで編んだ青年は、かつて桃白白タケバイバイに父を殺され、父を生き返らせるために孫悟空と冒険を共にした聖地カリンの幼き少年だった。

20代になったウパは父親ほどではないにしろ背は伸び、よく鍛えられた引き締まっ

た肉体の好青年に育っていた。

聖地カリンでの生活に不自由はない。

ウパ自身、生涯の伴侶と子宝にも恵まれている。

しかしウパには、ある想いがあつた。

(悟空さん……僕はあれから父上に稽古をつけてもらい、カリン塔にも上つた。今一度、あなたに会えるなら是非お手合わせを願いたい。そのためにはまず、僕が強くなつたところを見てもらわなくては……ッ!!)

聖地カリンを守る者として、ウパは父・ボラとの過酷な稽古に励んだ。

そして17歳になった時、ウパはカリン塔への登頂を果たした。

さらに3年間、カリンとの修行によつて超聖水の奪取に成功し、その戦闘力は武天老師に肉薄する140ほどに向上していた。

実力的には今大会、最強の参加選手といえる。

「キーラ選手は軍隊出身、特技はマーシャルアーツだそうです!! 対するウパ選手は全くの無名。果たして勝負の行方はどうなることでしょうか……では初めてください!!」

ウパとキーラが睨み合い、お互いに構えを取る。

ウパはボラから基礎を学び、そしてカリン塔でウパに稽古をつけたのはカリン様とヤジロベエであつた。

ゆえにウパの戦闘スタイルは、ヤジロベエの剣術からヒントを得ていた。

(一撃必殺……拳法とは、居合のように一瞬で終わらせること)

民族衣装のズボンの懐に、ウパは両手を突っ込んだ。

「この野郎……ナメやがって!!」

その様子がキーラの目には見下しているように映ったのか、キーラはボクシングの構えで軽快なフットワークを刻み、ウパとの間合いを詰めていく。

そして素早いジャブを浴びせようとするが、あっさりと躲されてしまった。

「なに——ぐはっ!」

一閃。

ウパのポケットから飛び出した狐拳こけんが、正確にキーラの顎を撃ち抜いた。

「しょ、勝負あり!! ウパ選手の勝ちです!!」

両手を合わせ、ウパは気絶して白目を剥いたキーラに一礼をする。

「これは強い!! ウパ選手、想像を上回る圧倒的な強さで、軍隊上がりのキーラ選手をたつたの一発で倒してしまいました!!」

これにはアナウンサーも感激であった。

(いやあ、素晴らしい。彼は強い……天下一武道会の参加者はこうでなくっちゃ!!)

一方で、ウパの存在を警戒する者もいた。

（あわわわわ。 ななな、 なんとということだ……あいつはヤバいぞ!!）

それは一回戦でスポポピッチを破ったミスターサタンだった。

彼は内心、 かなり焦っていた。

何故なら今の動きを見る限り、 ウパは確実に自身より実力が上だったからだ。

（あの身のこなし……あの時のワケわからんヤツと被るぞ!!）

◇ ◇ ◇

ミスターサタンには苦い思い出があった。

それは修業時代、 彼がサタンの城という道場に通い、 師匠の下で格闘技の稽古をしてきた頃の話。

サイヤ人との戦いが終わった直後くらいの頃だった。

「師匠。 結局、 サイヤ人ってなんだったんでしようか？」

「はははっ、 トリックじゃトリック!! ピッコロ大魔王もそうやって天下を取ったん

じゃよ!!」

「は、 ははは。 なんだ、 トリックか。 はははは!!」

若き日の本名マークことミスターサタンは、 サタンの城の中でも飛びぬけた才能の持

ち主であり、その強さから世界選手権に初優勝を果たした。

そして巷ではミスターサタンと呼ばれ、有名になり始めていた。

そんなある日、遠征先の南の都の酒場で、サタンは師匠と祝勝会を開催して酒盛りをしていた。

そんなめでたい日に、事件は起こったのである。

「はあーつはははは!! いやー愉快じゃのう我が弟よ!!」

「天津飯とチャオズ、それにピッコロ大魔王まで死ぬとはまさに最高の気分だ」

「いひひひ。天のヤツ、ワシの言った通りロクな死に方せんかったな」

「風の噂では孫悟空も去年死んだらしい。これで我々の邪魔をするヤツはいませんな」

不意に耳に入ってきたのは、鶴の帽子を被った老人と、何故か頭部が機械化されたよ
くわからない男の会話だった。

「おい見ろマーク!! なんだアレは、三つ編みじゃ三つ編み!!」

「頭が機械なのもウケますね!!」

それを聞いた桃色の衣装に身を包んだサイボーグ男は、静かに立ち上がった。

「なんだ? 君、世界選手権王者のこのミスターサタンに何か用かね?」

「ワシはその師匠じゃぞ!!」 文句があるならお話ししようか、奇抜な髪のおツサン!!」

それを聞いてもなお、サイボーグ男は何も喋らない。

「おいおい、何か言ってもらわなければ困るよ。」

「ほーれ、口開けてやろうか？」

サタンの師匠がサイボーグ男の口に手を伸ばした瞬間だった。

「……へ？」

ぼとん、と師匠の右手が床に落とされた。

サイボーグ男が放った手刀により、なんと師匠の腕が切り落とされたのだ。

「ぎゃあああああああああッ!! ——ッ!？」

あまりの激痛に師匠は手首を押さえて絶叫するが、その絶叫はすぐに止まった。

なぜならサイボーグ男の舌が深々と、師匠のこめかみに刺さっていたからだだった。

「な、ななな、なっ!？」

目の前で師匠を惨殺されたサタンは、あまりにも突然すぎる出来事に完全に狼狽えていた。

「キサマにいいことを教えてやろう。私は世界一の殺し屋、タオバイバイ桃白白だじょーん」

それからしばらく、サタンにとっては地獄の時間だった。

桃白白とついでに鶴仙人から長時間拷問にかけられ、瀕死の重体の状態で道端に捨てられ、翌朝になって虫の息だったサタンは通行人に救出され、救急車で病院に送られることとなった。

なんとか一命を取り留め、病院で意識を取り戻したサタンは固く誓った。

(こ、これからはワケのわからん相手とは絶対に戦わんぞ……)

こうして現在のミスターサタンの人格が形成されたのだった。

メチャクチャ強そうなヤツとは絶対に戦わないという、現在の人柄が。



「さあ第三試合です!! ジュエル選手対マイティマスク選手!!」

若く、カンフースーツに身を包んだ金髪の男と、謎の青い被り物をした道着姿の男が入場する。

「ジュエル選手は名門多林寺おうれんじで修行し、各地の格闘大会で入賞する実力派のカンフー使い。女性人気ナンバー1の格闘家です!! 対するマイティマスク選手は謎の覆面レスラーとして、プロレス界で台頭してきています。期待の新人同士、注目の対決です!!」
観客席から黄色い声が上がった。

「きゃあーーーーーっ!!」

「ジュエル様ーーーーっ!!」

もちろんそれはマイティマスクに対してではなく、全てジュエルに対するものだっ

た。

「くっそお、お前をギツタンギツタンに倒して恥をかかせてやる」

「フッフ、それはどうかな？」

「では、始めてください!!」

ゴングが鳴る。

しかし試合はあまりにも一方的な結果に終わってしまった。

「……10!! ジュエール選手の勝ちです!!」

ジュエールはマイティマスクのラリアットを躲して、カンフーで言うところの寸勁すんけいを背中に放ち、マイティマスクがふらついたところに追撃の飛び蹴りを浴びせ、一瞬の間にマイティマスクを下したのであった。

「君は寺のむき苦しい男たちと同じだったよ。だから負けたのさ」

実力でも人気でも敗北した。

これはマイティマスクにとつては最大の屈辱であった。

「続いて第四試合。ブルーザ・プー選手対プリンター選手!!」

アラジンのような風貌の巨漢と、どこかで見たことある俳優のような風貌の男だった。

「プリンター選手は格闘選手権でもお馴染み、残虐ファイトの悪役レスラーです!! 対す

るブルーザ・プー選手はその昔、第21回天下一武道会の予選に挑戦されたそうですが、惜しくも予選で敗れてしまった苦しい思い出があるそうです。悲願の本戦出場、果たして結果を残せるのか!!」

第四回戦。

この試合は序盤こそブルーザ・プーが猛攻を仕掛けたものの、タフさが売りのプンターに掴まってしまい、形勢逆転。散々サンドバックにされた拳句、敗北してしまった。「す、ストツプ!! ストローラーツプ!! 勝者、プンター選手!!」

「やめてください!!」

「プー選手が死んでしまいます!!」

「ワハハハハハツ!! この調子でジュエルとか吹かしたヤツもぶっ倒してやるぜ!!」
数人がかりでようやくプンターの暴走が止まった。

ブルーザ・プーはかつて天下一武道会の予選にて、クリリンに破れた苦しい思い出がある。
る。

悲願の本戦出場を果たしたものの、怪力プンターの前に惜しくも敗れてしまった。

「ここで武舞台の清掃と点検を兼ねまして、二時間の小休憩させていただきます、その後は準決勝第一試合、ミスターサタン選手対ウパ選手となります!!」

観客が歓声を上げる中、サタンは一人、控室で冷や汗を流して震えていた。

(ま^ずい^まず^いま^ずい^まず^いま^ずい!! まさかあのウパという者、桃白白の弟子じゃあるまいな!?)

果たしてミスターサタンは、聖地カリン最強の戦士・ウパに勝てるのであろうか。

サタン世界チャンピオンへの道!! 第24回天下一武道会～後編～

(二時間か……今のうちに食事を済ませておくか)

控室で思い立ったウパは、食堂へと向かった。

思えば聖地カリンを飛び立ってから、精神統一を続けていたため今まで何も食べていない。

流石に空腹を覚えたため、今のうちに食事を済ませておこうと考えたのだ。

「ジュエールさまああああ!!」

「サインください!!」

「僕を取り合わないで。さあ、順番にサインを書いてあげるよ」

一方、ジュエールは女性ファンたちに囲まれ、そのファンサービスとして一人ずつ丁寧にサインを書いていた。

そんなジュエールの前に、一人の巨漢が現れる。

「へへへ!! おいジュエール、女の前でいい顔できるのも今のうちだぞ!」

「君は……次の試合でボクにやられるプンター君だね?」

「その減らず口、試合で叩けなくしてやるぜ!!」

「いいよ。ボクの拳法に勝てるヤツなど、この世には存在しないんだ」

二人の鬪気とっきが炎のようにメラメラとぶつかり合う。

どちらもこの時代の格闘技界では有名かつ実力派の武道家であり、ゆえにお互いがお互いを邪魔な存在だと思っていた。

それから二時間が経って、ようやく準決勝第一試合が始まろうとした時、事件は起きた。

「えー、ここで皆様にお知らせ致します。準決勝第一試合にてミスターサタン選手と対戦定のウパ選手ですが、さきほど食中毒により病院へ搬送されたとのことです。従いまして準決勝第一試合はミスターサタン選手の不戦勝となります!!」

なんと、ウパが小腹を満たすために摂った食事が裏目に出ってしまったのだ。

(いってて。な、なんてことだ……まさか、こんな形で試合に出られなくなるとは!!)
これもまた、サタンがチャンピオンになれた原因の一つであった。

実力的には常識の範囲内では強者に入るミスターサタンだったが、明らかに彼よりも実力は上であろう人間はこの世に沢山存在する。

それはクリリンやヤムチャはもちろんのこと、過去の参加者と比較しても、サタンが勝てそうな相手は、せいぜいランファンと男狼くらいのものであろう。あるいは体臭に

耐えることができればバクテリアンにも勝てるかもしれない。

つまり、ミスターサタンの素の実力とはその程度なのだ。

ナムやギランはおろか、パンプットにも及ばない、本当に普通の人よりちよつと強い程度。

それなのに何故サタンが世界大会を制してきたのか。

——それはサタンが並外れた強運の持ち主だったからだ。

加えて桃白白との戦いから得た教訓によつて、自分に勝ち目のない勝負は仮病などを使つて逃れてきた経緯もある。

今回もサタンは、殆ど奇跡のような勝ちを得たということである。

(な、なんだかよくわからんが、とにかく私は生き残れたぞ!! ジュエールかプンター、どっちが勝つてもアイツらなら恐らくなんとかなるぞ!!)

ミスターサタンは調子を取り戻していた。

最大の難関であるウパには戦う事なく勝利したため、残ったジュエールとプンターなら実力で倒せると判断したからだった。

こうして始まった準決勝第二試合。

「それでは、始めてください!!」

ゴングが鳴り、ジュエールは最初から本気で構えた。

「さあ、かかってこいプンター」

「その鬱陶しい笑み、二度と浮かべられなくしてやるぞ!! はあーっ!!」

プンターはその巨体に見合わぬ俊敏さを持っていた。

繰り出される連打は威力、スピード共になかなかのものだったが、ジュエールはそれを華麗に受け流していく。

「はっ!!」

そしてジュエールは大地を力強く踏みつけ、飛び上がってプンターの顔面を蹴り、その反動を使ってさらに大きく跳躍。そしてプンターの顔面を踏みつけ続けた。

「ジュエール選手、凄まじい空中殺法です!!」

「くっ、この野郎オツ!!」

プンターはジュエールの足を掴み、ジュエールを投げ飛ばした。

しかしジュエールは投げ飛ばされた先で綺麗に着地して、突進してくるプンターを待ち構えた。

「おーっつと!! ジュエール選手、なんとか体勢を立て直しましたが、武舞台ギリギリだ!!」

「きゃあああジュエールさま!!」

「そこには危ないわ!! 逃げて!!」

プンターの突進は会場のみんが思う以上に速かった。

「そのまま場外に押し出してやるぜ!!」

瞬く間に迫るプンター。

しかしジュエールは直前になって微笑んだ。

そしてプンターの体に触れて、受け流すようにプンターの加速を手伝った。

「うわあああああつ!!」

それがプンターの勢いをつけてしまい、逆に場外へ落とされる結果となってしまうた。

「じよ、場外!! プンター選手、落ちてしまいました!! よって決勝進出はジュエール選手です!!」

まさに柔と剛の対決。力が利に破れた結果となった。

勝負の女神は武術としての柔を使ったジュエールに微笑んだ。

「く、クソオ……」

「プンター、君の欠点は力任せなことだよ。力は君のほうが上だった」

そう言いながらジュエールは武舞台から降りて、控室に入ってミスターサタンをすれ

違いざまに見つめた。

(このジュエールという男、想像以上にできるようだ……本気でやらねば)

(見てろミスターサタン、このオレがお前を倒して世界チャンピオンになってやる)

そして三十分の休憩を挟んで、遂に第24回天下一武道会の決勝戦が始まるうとしていた。

「さあいよいよ決勝戦です!! 世界格闘技王ミスターサタン選手対イケメン拳法家ジュエール選手。天下一はどちらか、さあ始めてください!!」

サタン、そしてジュエール、二人は構えたまま数十秒ほど睨み合った。

(流石はミスター・サタン……打ち込む隙がない)

(三大会制覇がかかっておるのだ。こんな優男に負けられるか……ッ!!)

先に仕掛けたのはサタンのほうだった。

殴打を浴びせようとするが、ジュエールはそれを受け止め、カウンターの手刀を放つが、サタンはそれを見事に受け止め、前蹴りを放つたもののジュエールはそれをガードして寄せた。

衝撃で吹っ飛ばされたものの、ジュエールに殆どダメージはない。

「流石にやるね。これほどの手応えは久しくなかったよ」

「ジュエールとやら、結構やるようだがこの私には敵わないぞ!!」

「言ってくれるね。それなら、これはどうかな……ッ!!」

手を回しながらジュエールは構えを取ると、手刀を構えてサタンへと突進する。

「バカめい、正面からきおったな!!」

サタンが反撃のパンチを繰り出す。

しかしジュエールは寸前で足を止め、高く宙へ舞ったのだ。

「きいやあああああああああッ!!」

「ぐ、ぬう!?!」

それはプンターを苦しめた空中殺法。

サタンは受けの中でも最も強靱とされる十字受けにて、なんとかジュエールの攻撃に

耐えた。

しかし少しずつだがサタンの受けが崩れ始め、足腰が下がってきた。

(ま、まずい。このままじゃ……破られる!!)

遂にサタンのガードが崩れる。

「これで終わりだ、ミスターサタン!!」

そんなサタンに、すかさずジュエールは強烈な足刀蹴りを浴びせる。

顎を射抜かれたミスターサタンは白目を剥き、その場に倒れ込んでしまった。

「ダウン!! サタン選手、強烈な蹴りを食らってダウンです!! カウントを取ります、1

……2……」

アナウンサーがカウントを取り始めると、ジュエールは両手を合わせて一礼した。

「カウントするだけ無駄だよ。僕の蹴りを食らって立てたヤツは、まだいないからね」

「……9……お、おっと!!」

「なんだと……ッ!?!」

しかしジュエールは驚愕することになる。

これまで百発百中、必殺の一撃だった自身の足刀蹴りを食らってもなお、サタンはフラフラとした足取りだが立ち上がって構えたのだ。

サタンの強み、それは桁外れの耐久力であった。

(桃白白とかいうヤツの拷問のほうがよくほど痛かったぜ……)

あの拷問があつたからこそジュエールの必殺の一撃を食らっても立ち上がれたし、その後手加減されていたとはいえ、セルの一撃を食らっても絶命を免れているのだ。

そう、ミスターサタンの耐久力はギャグマンガ並みだった――。

「フフフ、効いたぞ。だがこの私を最も苦しめた者の攻撃に比べれば、まだ甘い!!」

「小癪な!! ならばこれはどうだ!!」

ジュエールは飛びかかり、ミスターサタンに閃光のような連撃を浴びせる。

サタンはそれを防御するだけで精一杯だったが、その瞳からはまだ闘志は消えていな

い。

それでもジュエールの連撃はじわじわとサタンのスタミナを奪っていき、少しずつだがサタンのガードが下がってきた。

サタンの腕が降りた瞬間。

「チエストオー!!」

ジュエールの鋭い突きが、サタンの頬に突き刺さる。

「な、なに!?!」

しかしジュエールの腕に感じたのは、サタンからの力だった。

サタンはジュエールの殴打に耐え、首の力だけで拳を押し戻していた。

「どりゃああああああ!! サタンミラクルスペシャルウルトラスーパーメガトンパンチ

!!」

サタンのタフネスに驚愕し、呆気にと取られていた一瞬の隙だった。

サタンの剛腕が振るわれ、その拳が深々とジュエールの鼻っ柱を貫く。

サタンの強烈な一撃をモロに食らったジュエールは、意識が飛んだまま仰向けに倒れた。

「サタン選手、起死回生のカウンターだ!! カウントを取ります!! ワン、ツー、スリー

……」

サタンは息切れを起こし、もはや立っているのもやつとの状態だった。そんなサタンに幸運が訪れる。

ジュエールは今の一撃で失神したまま、立ち上がることができなかつた。

「テン!! ダウン!! ジュエール選手、立ち上がれませんでした!! よつて第24回天下一武道会、優勝はミスターサタン選手!! 悲願の三大会制覇、伝説的な瞬間です!!」

サタンは、実力で強豪ジュエールを叩きのめした。

明暗を分けたのは、サタンの肉体の頑丈さだった。

「へっ……勝ったの? ……は、は……っはははは!! ナンバーワoooooooooo!!」
左手を腰に当て、右手でピースサインをしながらサタンは豪快に叫んだ。

「すごいぞー!!」

「三大会制覇なんて初めて見たぞ!!」

「サーターン!! サーターン!!」

「うおおおおおおおおお!!」

こうして第24回天下一武道会は、ミスターサタンの優勝で幕を下ろした。

少年の部ではサタンの愛娘・ビーデルが優勝し、親子優勝を果たしたことも話題となった。



「……なんだべ、コイツ?」

パオズ山の孫悟空の家にて、チチはテレビの前で呆れかえっていた。

「なんでも天下一武道会で優勝した、格闘技の世界チャンピオンらしいだ」

牛魔王が呆気にとられているチチに、サタンの正体を説明する。

「こんなのが優勝するだなんて、レベル低いだなー今の武道会って」

「そりゃあ悟空さや武天老師さまたちが参加してねえだ。こんなもんだべ」

「おっ父、^{とう}出ればよかったべ? 優勝間違いなしでねーか」

「病人を差し置いて武道大会なんて出れねーべき」

「それもそうか……それにしても悟飯ちゃんったら、今頃どこほつつき歩いているだか。

宿題もたくさん残っているっていうのに」

ミスターサタンのことなど、チチたちにとってはどうでもよかった。

今は一刻も早く心臓病に犯された悟空が回復し、そして最愛の息子である悟飯が帰ってくるのがチチの望みだった。

絶望への反抗!! 誇り高きサイヤ人の王子、ベジータの最期!!

これは悟空達が生きた時代よりも未来の話。

「ご、悟空さ……嘘だ、嘘だべ？」

「お父さん……っ!!」

「孫くん……」

「悟空っ!!」

エイジ764年末。

この日、孫悟空はその生涯に突然、幕を下ろすことになってしまった。

ウィルス性の心臓病に肉体を蝕まれ、いくら戦闘で鍛えたサイヤ人の肉体と云えども、病魔には勝つことができなかつたのである。

チチ、悟飯、クリリン、ヤムチャ、ブルマ、家族や仲間たちは深い悲しみに暮れることとなる。

そしてもちろん、この男も――。

「か、カカロット……戦闘民族サイヤ人ともあろう者が、心臓病なんかで死にやがって

孫悟空とベジータはライバル関係にあった。

初めて戦った時はベジータが圧倒的に優勢だった。だが界王拳という底力を見せつけられ、下級戦士と見下していた悟空の強さを目の当たりに、ベジータのプライドはズタズタに砕かれた。

そしてナメック星での戦いで、ベジータは各段に戦闘力をあげていった。

しかしそれから常に、悟空はベジータの一步先を歩んでいった。

ギニュー特戦隊を圧倒した時も。

フリーザとの戦いでも。

そしてスーパーサイヤ人への覚醒も。

そして今回——悟空に並ぶ力を得たのは、皮肉にも悟空を失ったことがキツカケだった。

それからしばらくは平和な時を過ごしていた。

ベジータとブルマの間にはトランク스가生まれ、悟飯は学者になるために勉学に励みつつも、ピッコロが悟飯に稽古をつけていた。

クリリンはカメハウスで亀仙人たちと暮らし続け、天津飯とチャオズは修業の旅を続

け、ヤムチャはプロ野球選手として巨額の富を得ていた。

しかしこの平和は、まさしく束の間の平和に過ぎなかった。

『緊急事態が発生しました!! 謎の二人組によって北の都が突如、破壊されてしまいました!!』

人造人間17号と、人造人間18号の出現だった。

ドクター・ゲロによって生身の人間をベースに改造された二人は、ドクター・ゲロを恨んで生みの親である彼を殺害。

そして人間そのものに恨みを抱いた兄妹は、人類を殺戮することで快楽を得ていた。

「おぎゃあ!! おぎゃあ!!」

「おーよしよしよし……それにしても大変なことが起きたわね。孫くんが生きていれば……」

そうブルマが呟いた瞬間だった。

「……カカロットだど?」

突然、ソファアで寝転がっていたベジータが声をあげたのだった。

「孫くん孫くんって、病気で死にやがった下級戦士のカカロットに何ができる!!」

「ちよつとベジータ!! そんな言い方ってないじゃない!!」

「うるさい!! 人造人間だかなんだか知らないが、このオレ様がぶっ壊してやる」

そう叫んでベジータは廊下を駆け抜け、外へ飛び出していた。

ブルマはトランクスをたまたま近くにいた使用人に任せ、ベジータを追いかけた。

「ちよつとベジータ待ちなさい!! アイツら得体が知れない。あんた一人で行くなんて無謀だわ?!」ピッコロたちと一緒に戦うべきよ!!」

ブルマはなにか、嫌な胸騒ぎがしていた。

悟空亡き今、ベジータはこの地球で最強の戦士と言える。

しかし悟空亡き今、そのベジータはさほど修行に身が入っておらず、カプセルコーポレーションで毎日怠惰な生活を送っていた。

最低限のトレーニングはしているため、強くなったわけでも、弱くなったわけでもない。

だが今のベジータはピッコロときほどレベルは変わらない。

だからこそブルマは保険として、悟空とピッコロがラディッツと戦った時のように、ベジータとピッコロでタッグを組むべきだと考えた。

そうすればきつと、謎の人造人間に勝てると思った。

——しかし。

「ピッコロだと? ふん、オレ様は戦闘民族サイヤ人の王子、ベジータ様だ。あんなヤツと組んで戦うくらいなら、一人だけで戦って死んだほうがマシだ!!」

そうやってベジータはスーパーサイヤ人に変身し、瞬く間に舞空術で飛んで行ってしまった。

「ちよつとベジータ!! 待ちなさいよ、ベジータ!! ……ベジータ」

ブルマは遠ざかるベジータの姿を見ながら、一抹の不安を覚える。

だが、彼女にできることは祈る事だけだった。

きつとベジータは人造人間を倒し、世界の平和を守ってくれる。

そう信じるしか、ブルマにはできなかつた。

「キサマらか、噂の人造人間とやらは……ククク、なんだガキじゃないか」

二人の人造人間は北の都を破壊しつくしていた。

破壊行動を楽しんでいたため、ベジータにあっさりと発見されたのだ。

「なんだいアンタ? アタシたちに何か用かい?」

「お前は……なるほど、ベジータか」

「ほう、このオレ様を知っているようだな。だったら話は早い、キサマらを破壊してやるぜ」

そうやってベジータは気を高めた。

眩い黄金の光に全身が包まれ、大地が、空気が、大きく揺れ動いた。

「こんなヤツ、さつさと殺しちやおうよー17号」

「まあ待てよ。こいつの相手はオレにさせてくれよ」

「なんだい。アンタ独り占めするつもりかい？」

「いいだろう？ 孫悟空はどうやら死んでしまったらしいからな。この世界じゃこのベ

ジータとピッコロが二大強者つてことだ。オマエにはピッコロのほうを譲つてやるよ」

ニヤニヤしながら17号は18号の説得をする。

「ふーん、まあいいわ。じゃあそのピッコロつてヤツはアタシにやらせてよ」

「そういうことだ。オマエの相手はオレがしてやるぞ」

「フン。すぐに二人がかりでかかってこなかったことを後悔させてやるぜ。はあーッ

!!」

ベジータは気を高め、17号目掛けて突進した。

ベジータの殴打を受け止める17号だが、ベジータは突きや蹴りの嵐を何度も17号に放つ。

17号も手足を出して、二人はラッシュの打ち合いをする。

しかしベジータの攻撃を避けた17号は、ベジータの背中を殴打する。

吹っ飛ばされたベジータを追撃しようと、17号はとてつもないスピードでベジータ

に迫ったが、待っていたと言わんばかりにベジータは片手を開いた。

そして手のひらに気を集中して、狙いを17号に定める。

「喰らえ!! オレ様の新必殺技、ビッグバンアタック!!」

「——ッ!?!」

凄まじいエネルギーの塊が手のひらから飛び出し、17号は動きを止めた。

躲しきれぬタイミングではなく、ベジータのビッグバンアタックは17号に直撃する。

「……フン、他愛もなかったな」

ベジータはニヤリと口元を釣り上げた。

「——それはオマエの攻撃のことかな?」

「なに!?!」

だが一瞬の喜びに過ぎなかった。

17号は自分の周囲に緑つぼいオーラを纏い、無傷で手のひらを開いてベジータを見て不敵な笑みを浮かべた。

17号はバリアで自分の身を守ることができたのだった——。

「なるほど……確かに生身の人間にしては強い。だがオレ達が警戒するほどではないな」

「なんだと!? キサマ、このベジータ様が警戒するほどではないだど!? サイヤ人は戦鬪種族だ、ナメるなよ!!」

それからベジータは気弾の連射を浴びせた。

何度も何度も、17号が避けきれないほどの弾幕を張ったつもりだった。

しかし17号は俊敏に動いて、残像を残しつつ徐々にベジータに迫った。

そして――。

「なにっ!?!」

「バーカ」

17号の鋭いパンチがベジータの腹部にめり込み、それはベジータの背中を盛り上げらせるほどに協力的なパンチだった。

呼吸困難に陥り、咳き込むベジータ。

すかさず17号は強烈な蹴りを叩き込み、ベジータは建物の残骸に叩きつけられた。

「が、はッ!?!」

吐血しながら、全身に広がる痛みにも苦悶するベジータ。

「どうした、戦鬪民族サイヤ人の王子が聞いて呆れるぜ?」

「この野郎……ッ!! ちゃあああああーッ!!」

ベジータは再び黄金のオーラをまとい、17号に向かって飛びかかった。

を解放していた。

その結果、さつきまで掠らなかつた攻撃が17号を捉えつつあった。

ベジータの攻撃を17号は防いだため、一発も届くことはなかつたが、確実に避けられる攻撃は減っていた。

サイヤ人の底力に少々関心した17号だったが、不敵な笑みは崩さなかつた。

(だが、たったそれだけのこと。力の差を埋められるほどじゃない——)

そう思いながらベジータと17号の攻撃が激しくぶつかり合い、少しだけ間合いが離れた瞬間だった。

17号が両手を合わせ、放ったエネルギー波がベジータに直撃したのだった。

ただのエネルギー波ながら、基礎戦闘力の違いからなのか、その威力はベジータが本気で放つビッグバンアタック以上のものがあった。

地面に叩きつけられ、仰向けに倒れるベジータ。

「くそお……ッ!!」

なんとか上体を起こそうとするものの、思うように体が動かない。

(潮時か。まあ、思ったよりは楽しめた……か)

ニヤリと笑い、17号は全エネルギーを込めたエネルギー波を放った。

「——ッ!？」

閃光に包まれるベジータ。

もはやベジータにはソレを避ける体力など残されていなかった。

エネルギー波を食らい、激しい熱が全身を襲った。

(か、カカロツ……ト)

走馬灯のように蘇る、悟空との戦いの記憶。

(ふ、フフフ……待っていやがれカカロツト、必ずキサマを、あの世で倒してみせる——)

誇り高きサイヤ人の王子ベジータ、遂に人造人間17号の前に力尽きる。

死に際に思い浮かべた、悟空の姿。

しかし皮肉なことに、ベジータは死後の世界で悟空と再会することはできない。

これまでたくさんの命を奪ってきた極悪人であるベジータは、魂となって地獄へ送られるのだ。

——戦闘民族サイヤ人の報われぬ最期であった。

絶望への反抗!! 悟飯にすべてを託して、ピッコロとクリリンの最期の戦い!!

「武天老師様、とんでもないことになりましたよ……」

「わかっておる……ベジータが、ベジータの気が」

ベジータの気が一気に膨張し、そして完全に消滅したことに、戦士たちは気づいていない。

「ウソだろ……ベジータのヤツ、ブルマを残してやられちゃったのか!」

戦士たちは各々、ベジータの死について心情を吐露していた。

「天さん……」

「それにしてもベジータを殺^やったヤツは何者なんだ」

悟空亡き今、最強の戦士と思われるスーパーサイヤ人ベジータが破れた。

それはベジータに対する個人的な感情を抜きにしても、戦士たちにとつては衝撃的な出来事であり、何よりそれほどの脅威が地球に存在することを思い知らされた。

それはもちろん、パオズ山で修行をしていた悟飯とピッコロも同様だった。

「そんな……ベジータさんの気が」

「あのベジータを殺すとは、とんでもないヤツが地球に現れたものだ」

「ピッコロさん、一体何者なんでしょうか?」

「そりやおみやあ、人造人間の仕業だがや!!」

突然の大声に、悟飯とピッコロが反応して振り返る。

そこにはクルマから降りて、ふてぶてしい表情で佇むヤジロベエの姿があった。

「ヤジロベエさん!!」

「どういうことだ、説明しろ」

「オレもカリン様から聞いたただけだがよ、人造人間っちゅーヤツらが北の都で暴れてよ、ソイツらどえりゃー強くてな、ベジータのヤツはアツサリ殺されちまったよ」

ヤジロベエの言葉には信憑性があった。

彼が暮らすカリン塔には、カリンという猫の姿をした仙人がいる。

カリンは下界の様子を探ることができるため、カリンを通じてヤジロベエは大方の事情を把握していた。

そのことを悟飯もピッコロも知っていたため、ヤジロベエの説明を真に受けて拳を握り締めた。

「人造人間だと……ソイツらということは、複数いやがるのか?」

「人造人間は二人だがや。ベジータを殺した後も、ヤツらは破壊を楽しんどる」

「人造人間……街を、人を、破壊しまくっているだなんて……なんとかしなきゃ!!」

悟空が病気で死に、ベジータが人造人間との戦いに敗れ、戦死した。

そして人造人間は破壊と殺戮を楽しんでいる。

そんな現状を聞いて、悟飯の心の中では正義感が燃え上がっていた。

「待て悟飯。ベジータがやられるほどの相手だ……無策でぶつかってもオレ達に勝ち目はない」

「そんな!! それじゃあ僕たちはどうすれば……」

「勝てる可能性があるとするれば、オレとお前が強力な一撃をヤツらに与えること。だが二人の人造人間がベジータを上回るとするなら、オレたち二人ではとても無理だろう」

しかしピッコロは考えていた。

ベジータに匹敵する自分のもとより、自分達以上の力を秘め、その潜在能力は父である孫悟空を超える悟飯の底力であれば、もしかしたら人造人間を出し抜けるかもしれない。

そのためには人数が必要であると。

「悟飯、お前はヤジロベーとカメハウスへ向かえ。クリリンもそこにいるだろうしな」

「ピッコロさんは?」

「オレは天津飯とチャオズ、そしてヤムチャを探してくる……」

彼らは自分たちより実力的には劣るものの、特にクリリンは戦闘経験が豊富でトリツキーな戦術が得意であり、格上相手に立ち回れるずる賢さと身のこなしがある。

天津飯には気功砲という必殺技があり、格上にも通用する威力を秘めている。

ヤムチャとチャオズは……作戦の成功には頭数が多いほうがいいだろうと、ピッコロは考えた。

——こうしてピッコロはその日のうちに全員を集め、カメハウスで作戦会議が行われた。

「なんだよピッコロ、人造人間を倒す作戦って言うのは」

クリリンが質問をすると、ピッコロは瞑っていた瞳を開けた。

「二人の人造人間は、どうやらベジータを超える力を持っているらしい」

「おいおい、そんなヤツをオレたちが倒せるのかよ?」

ヤムチャは全身の毛が逆立つような恐怖を覚えながら、ピッコロにそう質問した。

「お前たちはもとより、オレでも無理だろう。だが一つだけ手がある」

「その手つてのはなんだ、ピッコロ。もったいぶらずに教えろ」

天津飯がピッコロに説明を求める。

「オレの魔貫光殺砲まかんこうざつぽうは、相手のほうが強くても多少のことなら通用する技だ。悟飯もオレとの修行でそれを会得している。悟飯の魔貫光殺砲でヤツらを貫く作戦だ。だが最

大パワーの魔貫光殺砲は気を溜めるのにやたら時間がかかる。お前たちにはオレと共に、ヤツらを足止めして欲しい」

かつてナツパとの戦いにおいて、ピッコロがクリリンと悟飯に指示した作戦とほぼ同一の作戦だった。

あの頃は悟飯の未熟さと、ナツパの凄まじい戦闘力を前に失敗している。

しかしサイヤ人やフリーザとの戦いを経て、悟飯は肉体的にも精神的にも見違えるほどに成長している。

クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズの四人では、人造人間には歯が立たないだろう。

そこに自分が加われば、二人の人造人間を相手になんとか立ち回れる。

人造人間を直接見たわけではないが、ヤジロベエから聞かされたベジータの戦いぶりから、殺されない程度には持ちこたえられるのではないかと推測した。

そう考えた理由は単純だ。

ピッコロはベジータの気から、ベジータの実力を察していたのだ。

——気の大きさは今の自分とさほど変わらないことを。

つまり今の自分は、ベジータとほぼ同等の実力があると考えていた。

「オレたちが、足止めか……サイヤ人との戦いを思い出すな」

「だけどクリリン、相手はベジータより強いんだぜ? そんなことできるのかよ」

「だがピッコロの言うことは一理ある。今ヤツらを倒せる可能性があるのは、悟飯とピッコロしかないのだからな」

天津飯とクリリンは覚悟を決めていた。

「ボク、戦うよ。天さんの役に立ちたい」

チャオズも天津飯と運命を共にする覚悟だった。

「天津飯、クリリン、チャオズ……しようがねーな、オレもやってやるぜ!!」

「ああ、やるだけやってみよう。ピッコロも一緒に戦ってくれることだしな!!」

「決まりのようだな。では作戦は明日だ……せいぜい英気を養っておけ」

ピッコロの一言によってその日は解散となり、戦士たちは来るべき決戦に備えて休養をとった。

また天津飯とチャオズのように、修行をして決戦に備える者たちもいた。

ちなみに情報を伝達してきたヤジロベエはというと……。

「オレは闘わねーぞ!! この世が滅びる前にうんみゃーモノ食うんだ!!」

いつものように戦いを拒むのであった。

そして亀仙人はというと。

「ワシがいてもお荷物になるだけじゃろう。悔しいが、お主たちからの吉報を待つてお

る」

己の無力さを痛感しつつ、ピッコロたちが人造人間を倒すことを祈っていた。

——翌朝。

戦士たちは集合した後、人造人間が暴れているという北東方面へと向かった。

そしてカメハウスでは亀仙人とウーロン、そしてプーアルが戦士たちの健闘を祈っていた。

そんな時、一機の飛行機が降り立った。

「お、お主……」

それは黒い喪服に身を包んだブルマであった。

「ブルマよ、お主……大丈夫なのか？」

「ええ……」晩中泣いてたら少し落ち着いたわ」

よく見るとブルマの目は赤く腫れあがっていた。

殆ど家族を顧みなかったものの、それでも最愛だった夫を失った辛さを物語っていた。

「おいおい、葬式中なんだから？ いいのかよ抜け出してきて？」

「葬式は明日よ。葬式といっても、ベジータの遺体なんて無いんだけどね……」

そう呟くブルマの瞳から、また涙がこぼれ始めていた。

「ブルマさん、これ使ってください」

プーアルがブルマにハンカチを渡した。

「ありがとう、プーアル……ううっ」

「それでブルマよ、ワシに何か用かの？」

「ええ、昨日ヤムチャから聞いたわ。今日、みんな人造人間と戦いに行くってね」

「なるほどの……」

一人で祈りより、みんなで祈りたい。

ブルマの心境としては、そんなところだろうと亀仙人は察したのだった。



「これはこれは……揃いも揃って、大名行列のようだな」

「なんだいアンタたちは？ 鬱陶しいんだよ……全員殺すよ？」

人造人間17号は不敵な笑みを浮かべ、人造人間18号は不快そうに啖呵を切った。

そんな二人の前で、ピッコロら戦士たちは構えをとっていた。

「ほざけ……死ぬのはキサマらのほうだ」

「ピッコロ大魔王ごときが何を言っている？ ……よし18号、オマエにピッコロを任

せよう」

「アンタはどうするんだい？」

「その他大勢と遊んでやる。5対1だ、少しはゲームらしくなるだろう？」

「アンタは遊び好きね。まあいいわ、遊んであげるよ……ピッコロ大魔王」

戦いの火蓋は、ピッコロが放ったエネルギー波によって切つて落とされた。

17号と18号は二人は二手に分かれ、18号がピッコロを襲った。

「たあつ!! たたたたたあ!! じゆうえんツ!!」

激しくぶつかり合うピッコロと18号。

ベジータと同等の戦闘力を有するだけあつて、ピッコロは18号を相手に引けを取ら

ぬ戦いぶりを見せた。

そして17号はクリリンたちへと襲い掛かる。

「悟飯!! お前は作戦通り、退避して気を溜めるんだ!!」

「はい!!」

悟飯は返事した後、飛び退いて物陰に隠れ、人差し指と中指を額に当てて気を溜め始

めた。

ピッコロ直伝、魔貫光殺砲である。

「頼んだぜ悟飯……よし、みんな行くぞ!!」

「狼牙風風拳、久しぶりにお見舞いしてやるぜ!!」

「行くぞ、チャオズ!!」

「はい、天さん!!」

17号を相手に、四人は果敢に飛び込んでいった。

しかしそれは地獄の幕開けであった。

「ぐはっ!？」

17号の戦闘力は圧倒的だった。

クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズの四人で束になっても、まるで歯が立たなかった。

少しはマシな戦いができるかと四人は思っていたが、17号の強大な力を前に四人は一方的に弄ばれてしまう。

——そして遂に悲劇は訪れた。

「そんな、ボクの超能力が効かない……ッ!!」

「鬱陶しいガキだ。ふんっ!!」

17号が放ったエネルギー波によって、チャオズは跡形もなく消し飛んでしまった。

「そんな。ちや、チャオズが……やられちゃった」

チャオズだった残りカスが降り注ぐ中、クリリンは青ざめた表情でその方向を見つめ

た。

「チャオズ!! ……おのれ、許さん!! 絶対に許さんぞ、キサマアーツ!!」
「おい天津飯!! 待て、一人じゃ無理だ!!」

チャオズを殺されたことにより、怒り狂って突撃する天津飯。

そんな天津飯を援護しようと、ヤムチャも一歩遅れて飛びかかった。

しかし――。

「うるさい!!」

「――ツ!?!」

17号のエネルギー波が、天津飯の腹部を貫いた。

「が、は………ッ」

天津飯は薄れる意識の中、ヤムチャが立ち向かうのを見る。

それが天津飯が生涯、最期に見た光景だった。

「くっそおお!! よくも天津飯を……特大の操気弾だツツツ!!」

ヤムチャは右手から気の弾を出し、それを手の動きに合わせて操作した。

これがヤムチャの切り札、神様をも驚かせた操気弾である。

何度か17号を横切る気弾。

それには一切目を向けず、17号は涼しい顔でヤムチャを見つめ続けた。

「はああああ!! たりやあ!!」

操気弾は17号に直撃し、激しい爆発を起こした。

爆風を身に浴びて、クリリンは腕で顔面を覆った。

——しかし。

「ご、おあつ!?!」

——次の瞬間、ヤムチャの胸をエネルギー波が貫いていた。

「あ、ああ……そんな、ヤムチャさんまで………つつつ」

爆炎の中から姿を現す、手を張り出した17号。

不敵な笑みのままクリリンを見下していた。

「とうとうオマエ一人になってしまったな?」

(クソツ!! みんなやられちゃった………どうする? オレなんか勝てる相手じゃない

!!)

クリリンは腰を落として構えを取りながらも、冷や汗を流して歯を噛み締めていた。

横目で18号とピッコロの戦いを見る。

「うふふ、そろそろスタミナが切れてきたようね」

「ハア、ハア、ハア……くそ、化け物め!!」

18号は一切疲れを見せていないが、ピッコロは息を切らし始めていた。

(まずい、このままじゃ全滅してしまう……なんとかしないと!!)
クリリンは焦っていた。

そして必死になつて策を練ろうと、頭で色々と考えていた。

しかし戦闘経験豊富な彼をもつてしても、何をどう頭を捻つても、17号に対して有効な攻撃を浴びられるビジョンが見えない。

それでも17号をなんとか躲して、ピッコロを援護しなくてはまずいと思った。

(ドラゴンボールさえあればナメック星に行ける……それで殺されたみんなは生き返るんだ。だからピッコロは、ピッコロだけは死なせちゃいけない!!)
クリリンは覚悟を決めた。

なんとか17号の動きを封じ、ピッコロに加勢をする覚悟を。

「どうやら覚悟はできたようだな。それじゃ、死んでしまえ——」

17号は猛スピードでクリリンに接近してくれ。

(しめた……アイツ、一直線に飛び込んでくれた!!)

クリリンと17号の実力差は明白である。

しかし経験豊富なクリリンは、これをチャンスだと捉えた。

何故なら、あの技が有効な状況だからだ。

そしてそろそろ悟飯の気も溜まる頃合い。

17号の動きを封じ、ピッコロに加勢し、そして悟飯が17号に攻撃する最大にして最後のチャンス。

開いた手のひらを頭の横に、クリリンは腰を落として目を瞑った。

「食らえツ!! 太陽拳!!」

刹那、眩い閃光に大地が包まれた。

「うわっ、なんだ!?!」

突然、視界を奪われた17号は、ただひたすら目を覆うことしかできなかつた。

「今だ悟飯!! やれ——————っ!!」

そう叫んでクリリンは気を解放し、17号の前から戦線離脱。

一直線に飛んで、ピッコロと18号に近づいていく。

「もうつままないね……これで終わらせるよ!!」

「クソ、ここまでか……ッ!?!」

ピッコロはかなり疲弊していた。

息を切らし、18号の猛攻になんとか耐えていたが、いよいよ限界が近づいていた。

ベジータとさほどレベルが変わらない手前、ピッコロ単独では17号に匹敵する18

号には勝ち目などないのである。

しかし18号の背筋が凍る。

嫌な予感を感じた18号は空を舞い、ソレを間一髪で避けた。

円形の鋭い気の刃が18号の髪を数本、切断して遠ざかっていく。

「……あの野郎」

ピッコロは思わず口を釣り上げ、表情を明るくした。

「クソツ!! あと一歩だったのによ……ツ!!」

「なんだいアンタは? 17号はどうしたんだい?」

「17号はもうすぐやられるさ……ピッコロ、加勢するぜ?」

「キサマに手助けされる日が来ようとはな……行くぞクリリン!!」

「おう!!」

ピッコロの窮地を救ったクリリンは、そのまま18号との戦いに加勢する。

そして視力を奪われた17号だったが、ぼんやりとその視力が回復しようとしていた。

「くそつ、あのハゲ頭……ツ!!」

「食らえ!! みんなの仇だ……魔貫光殺砲!!」

次の瞬間、物陰から飛び出た悟飯は一点に集めたエネルギーを指先から放出した。

高圧のエネルギーが超高速で17号に襲い掛かる。

「17号!!」

それを見た18号も、思わず17号の安否を心配して叫んだ。

「クソ……さっきの光で目が見えないっ!!」

「悟飯!!」

ピッコロが叫ぶ。

「やれ、(っ)は——————んっ!!」

クリリンが目を開き、精いっぱいので声で悟飯に声援を送る。

みんなの期待を込めた、ピッコロ直伝の魔貫光殺砲は、17号の反射神経をもつても避けきれぬタイミングではなかった。

——しかし魔貫光殺砲は17号に届かなかった。

17号は直撃する寸前、バリアの展開に成功したのだった。

17号のバリアは非常に強力であり、あの二倍以上もの戦闘力に差があったラディッツさえ貫いた魔貫光殺砲を、なんと弾いてしまったのである。

「そんなあ……ッ!!」

悟飯は情けない声を漏らす。

「(っ)、悟飯……くそ、通らなかつたか!!」

ピッコロが悔しそうに咆哮する。

「そんな。悟飯の気はすさまじかつた……マトモに食らつてたら、悟空だつて危うい技

なの!!」

青ざめた表情で、クリリンは戦慄していた。

「今のは危なかった。マトモに食らっていたら怪我はしていたかもな」

17号は衣服についた埃を払いながら、悟飯の技を称賛する。

しかしその称賛は三人にとって、全く嬉しくない称賛だった。

ピッコロとクリリンは飛んで悟飯の周りへ降り立ち、悟飯を守るように悟飯の前で構えた。

(悟飯は、悟空の息子だ……サイヤ人だしな、とてつもないパワーを秘めてる)

クリリンは歯を食いしばながら、悟飯をチラ見して考えた。

(今のオレたちにヤツらは倒せない。だが悟飯……あるいはベジータが遺したあのガキなら)

そしてピッコロは窮地に陥って、逆に微笑んでいた。

自分の愛弟子にして孫悟空の息子であり、サイヤ人の血を引く孫悟飯。

そしてベジータとブルマとの間に生まれた、もう一人のサイヤ人の血を引く子——トランス。

——希望はこの二人だけだと、クリリンとピッコロは同時に思った。

悟空やベジータのようにスーパーサイヤ人に覚醒し、いずれ悟空やベジータを超える

超戦士になりえるのは、悟飯とトランクスだけであろう。

だがトランクスはまだ赤子。

悟飯はまだ子供、しかしピッコロたちから戦い方はある程度、学んでいる。

今の悟飯に勝ち目はない。

そして悟飯まで死なせてしまつては、トランクスも戦士として育たない。

——クリリンとピッコロは、覚悟を決めた。

「おいピッコロ。おまえ、悟飯と一緒に逃げろよ」

「バカを言え。キサマ一人では時間も稼げなからう」

「ピッコロさん、クリリンさん……」

二人の背中を見て、悟飯は不安げに二人の名前を呼ぶ。

「悟飯。オレとピッコロが飛びかかるから、その隙にお前は逃げるんだ。いいな？」

「そんな……二人を見捨てられません!! ボクも戦います!!」

「悟飯。逃げろ、これは命令だ」

ピッコロが厳しく目を光らせ、それには流石の悟飯も狼狽えた。

「お前は孫悟空の息子だ。そしてサイヤ人の血を引いている……お前は生き延び、スーパーサイヤ人となり、そしてベジータのガキのトランクスを戦士として育て上げ、二人で人造人間を倒すんだ。いいな? これはオレからの命令だ」

希望をここで消すわけにはいかない。

そんな意志だったが、ピッコロは最後に微笑んだ。

「悟飯……オレと初めてマトモに喋ってくれたのは、お前だけだった。お前のことはたとえ死んでも忘れん。だから生きろ……生きて、平和を勝ち取ってオレたちの仇を取ってみせろ。そして夢を叶え、学者になってオレたちを安心させてくれ……頼んだぞ」

その優しい笑顔を最後に、ピッコロとクリリンは17号と18号に突撃していった。

「生きろよ、悟飯!! うおおおおおおお……」

「クリリンさん!!」

「行け、悟飯!! はあああああ……」

「ピッコロさん……うわあああああ……」

その日、悟飯はどうやって家に帰ったのか、全くと言っていいほど記憶になかった。

ただひたすら泣き叫び、大粒の涙を拭いながら、必死になって空を飛んだ。

クリリンとピッコロが、自分の身を犠牲して救ってくれたこの命、決して無駄にして

はいけないという気持ちで、悟飯はひたすら飛び続けたのだ。

決して後ろを見ず、前だけを見て、悟飯は激しい怒りと悲しみに耐えながら飛んだ。

「う、ううう……クリリンさん、ピッコロさん……うわあああああ……」

その時だった。

悟飯の中で、何かか目覚めたのは。

「許さなああああーっ!! 人造人間、絶対に許さないぞ!! うわあああーっ!!」

悟飯が黄金に輝いた。

髪が亜麻色に逆立ち、瞳の色まで宝石のように変色した。

——悟飯はこの日、スーパーサイヤ人に目覚めた。

——そしてピッコロとクリリンは悟飯を逃がすため、壮絶な戦死を遂げるのだった。

絶望への反抗!! 最後の仙豆を届けよ、ヤジロベーとカリン様の決死の作戦!!

人造人間17号と人造人間18号は、あまりにも強かった。

僅か二日間の間にベジータ、ピッコロ、クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズと、殆どの戦士たちは圧倒的な強さの前に破れ、そして命を落としてしまった。

残された戦士は悟飯と、まだ生まれたばかりの命——ベジータの子・トランクスのみ。

(ピッコロさん……クリリンさん……ヤムチャさん……天津飯さん……チャオズさん……ベジータさん)

パオズ山の奥。洞窟の中にて、悟飯は気を高め、それを一気に解放した。

一瞬だが、悟飯はスーパーサイヤ人に覚醒した。

だが、本当に一瞬。すぐに力尽きてしまい、悟飯は四つん這いになって息を切らした。「はあ、はあ、はあ……ダメだ。今のままじゃ、スーパーサイヤ人を維持できない」

ピッコロとクリリンの死によって目覚めたスーパーサイヤ人。

しかし悟飯まだスーパーサイヤ人に自在に変身したり、長時間変身することができずにいた。

(もつと、強くならなくちゃ……みんなの仇を討つんだッ!!)

地面を殴り、悟飯は固く誓った。

「お父さん……どうかボクに力をください」

そして悟飯の修行の日々が始まった。

——それから7年。

人造人間は破壊と殺戮をゲーム感覚で楽しんでおり、じわじわとはあるが確実に地球人口は減少しつつあった。

もちろん、人類はただ人造人間に黙ってやられようとしたわけではない。

人造人間に抵抗しようとする者たちはいた。

『国民の皆様、落ち着いてください。二人の人造人間は必ずや王立軍が討伐してみせましょう』

キングキャツルの国王が軍隊の派遣を決定。

二人の人造人間に対し、軍隊が何度も何度も襲撃を行ったものの、結果は言うまでもない。

軍隊は一年のうちに組織的な戦闘能力を失い、以降は王立軍の残党やレジスタンスによるゲリラ戦が中心となった。

もちろん、腕に覚えのある達人たちも人造人間討伐に名乗りを上げた。

「聞けーい!! この格闘技世界チャンピオン、ミスターサタンが人造人間などとふざけた野郎どもを破壊してくれるわい!!」

ミスターサタンも立ち上がった。

軍隊が壊滅した今、第24回天下一武道会を含めた三大会制覇という快挙を果たした、サタンが人類にとって最後の頼みの綱であった。

この宣言の後、サタンは人造人間の討伐へと向かった。

——以降、サタンは消息不明となってしまう。

サタン以外にも襲撃された地域の達人たちが、人造人間に立ち向かっていった。

「このギランさまをナメるなよ!! グルグルガムを食らってみろ!!」

「フン、これがどうしたというんだ?」

「鬱陶しいんだよ、この怪獣野郎が」

「ギエエエエエエエツ!!」

かつて天下一武道会で孫悟空と戦ったギランが殺された。

「この私がか時間稼いで見せる……受けてみよ、てんくうべけけん天空×字拳を!!」

「意味のないことを……波っ!!」

「無念——ツ!?!」

ナムも、村を守ろうと立ち向かったが、敵うはずもなく一瞬で消滅させられてしまっ

た。

人造人間は、あまりにも強すぎたのだった。

ピッコロやベジータでも勝てない二人に、もはや地球人類など成す術もなかったのである。

——こうして7年間の間に、およそ達人と言われる地球人類はほぼ消滅していた。

せいぜい戦闘力の高い人類はカメハウスを離れ、潜水艦の中で生き延びていた武天老師と、襲撃を受けていないパオズ山のチチや牛魔王、コソコソと物陰に隠れて生き残った鶴仙人と桃白白くらいである。

レジスタンスによる抵抗活動は続いていたが、結果は虚しいものだった。

「もっと張り合いのあるやつらはいないのかい？」

「どうやらピッコロやベジータ達以外に、面白そうな戦士はいないみたいだな」

「もういつそのこと、さっさと全員殺しちゃうよ、17号」

「まあ慌てるな。人間の恐怖に引き攣る顔が面白いんだろ？　じわじわと時間をか

けて、人間が恐怖に怯える姿を楽しみながら絶滅させていこう」

この時点で地球人類の人口は全体の7割ほどに減少していた。

しかし人造人間の戦闘力からすれば、進行は遅いほうである。

これは特に17号の意思によって、ゲーム感覚で人殺しをしていたためである。

彼らは恐怖に引き攣る人間の顔を楽しんでいたので。

「それにしても、もうこの街には人類は生き残っていないようだな」

「最後にド派手に花火にしちやおうよ、17号」

「そうだな。この街、最後の輝きということにしてしまおう」

そう言つて二人は空高く飛び、二人は手のひらを壊滅した街へと向けた。

エネルギーを込めて、完全に都市を消滅させてしまおうとした——瞬間だった。

「はあああああああああ————————————っ!!」

17号が、何者かによつて蹴り飛ばされたのであった。

「な、なんだいアンタは?」

それは若き青年であった。

山吹色の道着に身をまとい、その中には半袖の紺色のインナーを着用していた。

背中には大きく飯の文字が刻まれ、黒髪短髪の黒目の青年は、憎悪に満ちた表情で1

7号と18号を睨みつけていた。

「孫悟空?! ……いや違う、貴様は何者だ?」

その容姿は悟空を彷彿とさせるものだったが、別人であることを17号はすぐに見抜く。

「オレは……おまえたち人造人間を倒す者だ。はあああああああつ!!」

青年は気を目いっぱい高めると、その髪と瞳が明るく変色した。

逆立った金髪、エメラルドグリーンの瞳、そして全身をまとう黄金のオーラ。

17号と18号は、その姿に見覚えがあった。

「17号、こいつどこかで見覚えはないかい？」

「ベジータと同じ変身をしている。ということはサイヤ人……そうか、わかった。オマ

エは孫悟飯だな？」

この時、悟飯17歳である。

立派な青年に成長し、幼かったあの頃よりも戦闘力をあげている。

（7年前……オレは家族を捨てた。そしてピッコロさんたちの仇を討つため、必死に修

行を重ねてきたんだ。7年前の恨みを晴らし、平和を勝ち取ってみせる……ッ!!」

悟飯はますます気を高めていく。

「なるほど、7年前の戦いでピッコロとクリリンが捨て身でオマエを逃したんだったな」

「相当修行したみたいだね。でも金髪になったくらいじゃアタシらには勝てないよ」

「まあいいだろう……少しだけ遊んでやるか。いいだらう18号？」

「またアンタの遊び好きかい。好きにきな？」

「そういうことだ、オマエの相手はこのオレだ」

17号はニヤニヤ笑いながら両手を広げた。

(シメたぞ。2対1じゃ厳しい戦いでも、1対1なら……まずは17号を倒す!!)

こうして戦いの火蓋は切って落とされ、悟飯は17号に対してもてる力の全てをぶつけて、激しい猛攻を繰り返した。

しかし悟飯の殴打も、エネルギー波も、どれ一つとして有効打にはならない。

むしろ17号は不敵な笑みを崩さず、悟飯の攻撃を楽しんでいる様子だった。

「が、はあっ!?!」

悟飯は膝蹴りを食らい、蹲ったところで背中に激しい打撃を受け、地面に落とされた。

膝と手をつきながらもなんとか持ちこたえ、悟飯はフラフラしながら立ち上がった。

「なるほど、確かにパワーをあげたようだな……だけど7年前のベジータと差は無いな」

「なんだと!?!」

「ふん、オマエ程度なら本気を出さなくてもラクに殺せるぞ」

「くそお!! 魔閃光!!」

手のひらを頭の前で合わせ、激しいエネルギー波を17号に向かって撃つ。

躲かされてしまったが、これは悟飯も想定内の範囲内で、悟飯は魔閃光を放つてすぐに高速で移動して、17号の懐に入り込んだ。

「もう一発!!」

すかさず17号に向かって魔閃光をもう一発放った。

直撃したかに思われたが、17号は悟飯の魔閃光を右腕一本で弾き飛ばしてしまっ
た。

「なに!？」

悟飯は人造人間に対し、心底恐怖を抱いていた。

全身の震えが止まらず、嫌な汗が次々と吹きだしてくる。

まだ勝てない——人造人間との実力差を痛感し、絶望していた。

「スゴいよ、流石はサイヤ人。生身でよくここまで力をあげたものだな」

「くっ……!!」

「だけどオマエはそれで限界だ。見せてやる、エネルギー波とはこう撃つんだ!!」

刹那、17号はぱつと開いた手のひらから閃光が走った。

瞬く間にそれは悟飯のところへ到達し、悟飯に当たったソレは大爆発を起こした。

「うわあああああああああ————————っ!？」

悟飯の道着がボロボロになり、全身傷だらけになってしまった悟飯は仰向けのまま地
面へと落下してしまい、力なくスーパースァイヤ人も解けてしまった。

悟飯は完全に気を失い、目を瞑って倒れてしまった。

17号が着地し、ニヤニヤ笑いながら悟飯を見下ろす。

「久しぶりに楽しめたぞ。放っておいても死にそうだが、一応トドメを刺しておくか

……」

17号が悟飯にトドメを刺そうとした瞬間だった。

「なんだ!?! げほっ、げほっ!!」

突然、18号が苦しうに咳き込み始めたのだ。

17号が振り向くと、18号が立っていたあたりに謎の煙幕が立っていたのだ。

そう、18号に気を取られてしまったのが、17号の油断であった。

「どりえりやあああああああ……」

刹那、17号は背中に灼熱を覚えた。

「う、うああぎやあああああああ……」

届かない背中に手を伸ばそうとしつつ、17号はその激痛に苦悶する。

「今だーカリン様!! 悟飯に仙豆を食わせるチャンスだぎゃ!!」

「ほ……」

それはヤジロベーとカリン様であった。

カリン様が18号の周辺に煙幕を張り、17号の注意をそちらに向けた瞬間、ヤジロ

ベーはベジータの尻尾をも切り裂いた太刀で、17号の背中を切り裂いたのである。

「くそおー!! よくもやってくれたね!! 波あ……」

しかしヤジロベー達の作戦は失敗に終わろうとしていた。

「ひぎやっ!!」

18号のエネルギー波が、カリン様を掠めたのだ。

カリン様は18号の心を読んでいたため、直撃こそしなかったものの、その戦闘力さは決して埋められるものではなく、カリン様はその一撃で瀕死の重傷を負ってしまった。

「こいつ、絶対に許さん!!」

「ごおえっ!!」

そして反撃の態勢を整えた17号のエネルギー波が、ヤジロベーの腹を貫く。

「……頭に来たぜ。まとめて消し去ってやる!!」

「やっっちゃおう!! 17号!!」

17号は頭に血が上り、18号と共に空高く飛んだ。

そして予定通り、都市を消し去ろうとエネルギー波を放った瞬間だった。

(カリン様も、ヤジロベーさんも……まだ辛うじて生きている……っ!!)

悟飯が一気に飛び出し、ヤジロベーとカリン様を守るように立ち塞がったのだ。

「はあああああああ……」

そして悟飯は、見様見真似で覚えた17号のバリアを展開。

スーパーサイヤ人に変身し、その身で17号と18号の攻撃を受けようとした。

直撃の瞬間、まるで核爆発のような大規模な爆発に、この都市は包まれてしまった。

しばらくして爆炎が収まると、都市とその周辺は完全に荒野になってしまっていた。

「見たかい？ 孫悟飯のやつ、あの二人を庇ったよ」

「ふん。だが三人ともくたばったようだな……さあ18号、次の街へ行こう」

「ふふ、これでアタシたちの邪魔をするやつはいなくなつたね」

倒れ伏した悟飯と、ポロボロのカリン様とヤジロベエを見た人造人間の二人は、三人が死亡したものと判断してその場を離れたのだった。

「……………」、悟飯は、気絶しておるだけじゃ……………じゃが、ヤジロベエが……………」

瀕死の重傷を負いながらも、カリンはなんとか意識を保っていた。

這いながら、カリンは仙豆の袋を持って、ヤジロベエへと接近する。

「か、カリン……………さまっ」

ヤジロベエも意識が薄れてきていたものの、辛うじて生きていた。

「ワシは、もう……………ダメじゃ……………仙豆じゃ、お主が……………食えっ」

「か、カリン様……………お、オレはいいだ……………アンタが、食つてちよ……………」

「今の、世界に、必要なのは、仙人ではなく……………戦士じゃ……………」

「カリン、様……………」

「これを食べ、安全なところへ、悟飯を運び……………悟飯の怪我を……………頼んだ、ぞ」

カリン様は仙豆をヤジロベーに手渡した瞬間、息絶えてしまった。

「か、リ、ン、さ……ま………」

ヤジロベーも息絶える寸前だったが、持ち前のタフさでなんとか堪えていた。

ヤジロベーは悲しみと苦痛を堪えつつも、なんとか仙豆を喉に通せた。

その結果、ヤジロベーの腹に開いた風穴が塞がり、ヤジロベーは元気を取り戻す。

「カリン様……そりゃねーがや!! おみやーさんが死んじまつたら、もう誰も仙豆を作ることができねーでしょ!!」

ヤジロベーはカリンの亡骸を抱え、大声で泣き喚いた。

「……おい、悟飯、仙豆だがや。食べ」

仙豆の袋はヤジロベーが持っていた。

そして予備の仙豆をカリン様を持っていた。

しかしヤジロベーは仙豆の袋に手が届かない状態だった。

自身も動けない手前、ヤジロベーを回復させるのがカリン様にとって最善策だった。

己の命を犠牲に、ヤジロベーを復活させたカリン様。

その想いを無駄にするわけにはいかない。

ヤジロベーは七粒の仙豆が入った袋から一粒を取り出し、それを悟飯の口に無理やり押し込んだ。

仙豆を食べ、復活するまでは多少のタイムラグが存在する。

その際にヤジロベーはカリン様の亡骸を抱き抱え、悟飯に後目を向ける。

「悟飯、その仙豆はおみやーさんが使え……オレは役に立てねーからよ」

そう言つてヤジロベーはカリン様を抱えたまま、どこかへ立ち去つてしまった。

これ以降、ヤジメベーを見た者はいなかった。

そして悟飯は意識を取り戻し、しばらく呆然としてから、自分が人造人間に敗北したことと、仙豆をヤジロベーたちが届けてくれたこと、そしてヤジロベーとカリン様は自分のために命を貼り、そして絶命したと思ひ込んだ。

悔しかった。

あれだけ修行したのに、全く人造人間には歯が立たなかった。

それどころか、ヤジロベーとカリン様という大切な仲間をまた失う結果となった。

最も悟飯は気絶をしていたため、ヤジロベーが生存していることを知らない。

「くそおおお……」

やり場のない怒りを、スーパーサイヤ人に変身して晴らそうとする。

「人造人間め!! 絶対に、絶対に倒してやるぞ!! もっと強くなって、絶対に!!」

それから悟飯は闘い続けた。

成長してきたトランク스에稽古をつけつつ、人造人間に立ち向かい続けたのだった。

それからさらに5年の歳月が流れ——エイジ779年。
自分の強さに限界を感じ始め、死期を悟りつつある悟飯に——ある出会いが訪れる。

絶望への反抗!! 悟飯と武天老師の決意

エイジ779年、人造人間17号と18号による殺戮きつりくは続き、多くの地球人類が命を落とした。

『お知らせいたします。二人の人造人間によつて、ペツパータウンが廃墟と化しています!!』

ベジータ、ピッコロ、クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズたちが死に、カリン様も殺されてしまい、遺体は発見されなかったがヤジロベエとも音信不通。この時点で人造人間に立ち向かえる戦士は悟飯とトランクスしか残されていなかったが、サイヤ人の血を引く二人でも人造人間には敵わない。

カメハウス沖、潜水艦の中で亀仙人、プーアル、ウーロン、ウミガメの四人は絶望に打ちひしがれていた。

「だいぶ遠いから、この辺きつと大丈夫だよ」

「ああ、でももう終わりだぜ……俺たちだつていつまで生き延びられることか」

ウーロンが深いため息を吐くと、突然亀仙人が拳を握つて立ち上がった。

「よおーし、こうなつたらこのワシが人造人間を倒しちやおうかな!!」

「武天老師さま!! 無茶ですよ!」

「そっこだよ!! ベジータやピッコロですら殺されちゃったんだぜ? 誰も勝てないって!!」

プーアルとウーロンの言葉を受けて、亀仙人は力なく項垂れた。

「くうう……かつて武術の神と謳われた時代が懐かしいわい」

ベジータ、ピッコロ、クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズたちが死に、カリン様も殺されてしまい、遺体は発見されなかったがヤジロベエとも音信不通。この時点で人造人間に立ち向かえる戦士は悟飯とトランクスしか残されていないが、サイヤ人の血を引く二人でも人造人間には敵わない。

カメハウス沖、潜水艦の中で亀仙人、プーアル、ウーロンの三人は絶望に打ちひしがれていた。

「だいぶ遠いから、この辺きつと大丈夫だよ」

「ああ、でももう終わりだぜ……俺たちだっけいつまで生き延びられることか」

ウーロンが深いため息を吐くと、突然亀仙人が拳を握って立ち上がった。

「人造人間を倒せねば未来はない、こうなったらワシが人造人間を倒しちやおうかな!!」

「武天老師さま!! 無茶ですよ!」

「そっこだよ!! ピッコロやベジータですら殺されちゃったんだぜ? 誰も勝てないって

!!

プーアルとウーロンの言葉を受けて、亀仙人は力なく項垂れた。

「くうう……悟空さえ、悟空さえ生きていたら……!!」

かつて武術の神・「武天老師」と謳われ、悟空、クリリン、ヤムチャと、素晴らしい武道家たちを育て上げた亀仙人であったが、人造人間はもはや彼の武術が通用する領域ではなかった。

己の無力さを痛感し、亀仙人は歯を食いしばって拳を握ることしかできなかった。

「……待てよ、勝てぬにしても方法はあるぞよ」

「む、武天老師さま……なにを？」

不安そうに尋ねるウミガメを一目見てから、亀仙人は険しい表情を浮かべて一同の前に立つ。

「おぬし達、人造人間のニュースをよく聞いておくんじや」

「お、おい爺さん。一体なににする気だ？」

「武天老師さま、無茶ですよ!?! ヤムチャさまだつてやられて……」

「なあに案ずるな、なにもワシは奴らと戦おうとは思っておらん。第一、ワシの実力では奴らとは戦いにすらならないじやろう」

そう言いながら亀仙人はサングラスを外した。

(じゃがトランクスはまだ未熟、そして悟飯一人じゃ奴ら二人を相手にできないのも事実。となればこの老いぼれにできることは、一つしかなかるう……)

この時点で、亀仙人は覚悟を決めていた。

悟空亡き今、人造人間との戦いで死んでいった愛弟子のクリリンやヤムチャ、そして鶴仙人を離反して立派な武道家の道を歩みながら、やはり人造人間との戦いで戦死してしまつた天津飯やチャオズのことを思えば、彼とて人造人間を許せるはずがなかつた。

この日以降、亀仙人はプーアル、ウーロン、ウミガメと協力し、ひたすらラジオを聴き続けた。

——それから数日後、人造人間はオレンジシティに現れた。

人々は銃火器を持つて抵抗したが、人造人間を前に成すすべもなく殺されてしまつた。

「そんな、イレーザー……っ!!」

「クソツ、人造人間め!!」

人造人間の攻撃から難を逃れ、瓦礫に隠れる男女。

一人は金髪の長い髪の男で、わりと筋肉質な体型をしていた。

もう一人は黒髪の二つ結びで、二人とも年齢は同じ年くらいといった風貌だ。

「しっかりするんだビーデル!! アイツが作ってくれた時間を無駄にしちゃいけない

!!

「けど……っ」

「あは、17号!! 見つけたよ、人間をさ」

その声で、二人の背筋が凍った。

「誰かと思えば、さつき消した女の友達じゃないか」

「あはは、怯えちゃって。大丈夫だよ、すぐに友達の所に送ってあげるからさあ」

軍隊も、世界チャンピオンも、今抵抗を続けている謎の二人組も、誰だって人造人間には勝てない。

絶望しかなかった。

だが金髪の男、シャプナーは覚悟を決めていた。

「……ビーデル、お前は逃げるんだ」

「シャプナー、あんたまさか……!?!」

「オレが隙を作る、だから逃るんだ!!」

「いやよ!! あんたが戦うならわたしも戦うわ!!」

ビーデルは拳を握り、戦う意思を表明する。

「いいからお前は逃げろ!! お前はミスター・サタンの娘だ、アイツらに勝てる最後の希望はお前しかないだろ!!」

その言葉にビーデルは心を打たれ、拳を下ろす。

「いいかビーデル、生きて修行して、いつかアイツらを倒してくれ。頼んだぜ!!」
「シャプナー!?!」

ビーデルの呼びかけ虚しく、シャプナーは持っていた金属バッドを片手に特攻を始める。

「おらああああ人造人間!! くたばりやがれえ—————っ!!」

ゴン!!

鈍い音が響き渡るが、バッドで打たれた17号は微動だにせず、表情さえも変えない。逆にシャプナーが持っていた金属バッドが変形してしまい、殴った反動でシャプナーの腕がビリビリ痺れていた。

「ぐあ、クソが!!」

だがシャプナーは痛みをこらえ、ボクシングのファイティングポーズを取った。

「素晴らしい友情だ、涙ぐましいよ」

17号が薄ら笑いを浮かべ、シャプナーに形だけの賛辞を贈る。

「うるさい!! お前らなんかこのシャプナー様がぶっ殺してくれる!!」

「大した覚悟だ。いいだろう、褒美にオレもボクシングで相手してやろう」

「まーた始まったよ、17号の遊び好きが……さっさと二人とも殺^やっちゃいなよ？」

「いいだろう？ こいつはゲームだ」

それを聞いたシャプナーの頭の中で何かが切れる。

「殺^やらせない!! ビーデルだけでも絶対に生かさせる!!」

ステツプを踏み、かなりの速さでシャプナーは間合いを詰める。

彼もボクシング部、それなりに試合はこなしてきた男だ。

だがそれはあくまで一般レベル。

「やれやれ、これじゃあ一発貫つてやることもできないな」

17号があっさりシャプナーのジャブを躲していく。

あくまで常識的な高校生レベルの実力しか持たないシャプナーと、単独で宇宙の帝王

フリーザですら敵わない強大な力を持つ17号とでは、そもそも次元が違うのだった。

「そろそろゲームは終わりだな」

「——ッ!?!」

17号が放った一閃。

軽いジャブでシャプナーの首の骨を折り、シャプナーの命脈を絶ってしまった。

「そんな……シャプナー……っ!?!」

イレーザ、そしてシャプナー。

二人の友人を眼前で殺され、ビーデルは狼狽えてしまう。

悲しむ余裕さえ無い、あるのは絶望だけ。

ニヤニヤ笑いながら目の前に立ち塞がる人造人間を前に、体が無意識のうちに震えてしまう。

「残念、友達を守れなくて惜しかったな」

「17号、さつさと殺つちやいなよ。それともあたしがやるかい？」

「おいおい、楽しみを奪わないでくれよ。オレは人間が恐怖に引き攣る顔を見るのが好きなんだ」

その時、ビーデルの脳裏に去来するものは、楽しかった仲間たちとの高校生活。そして人造人間を倒すために立ち上がり、その後消息を絶った世界チャンピオンの父の姿だった。

最高の友達は、自分の命を守ろうとして散っていった。

偉大なる父は人類のため、勝ち目のない戦いに勇敢に挑んでいった。

そう振り返っているうちに、ビーデルは心の中で覚悟を決めていた。

「冗談じゃないわ……アンタ達はわたしをここで倒す!!」

強大な、勝ち目がないことは理解していながらも、ビーデルは腰を落として拳を構え

た。

「アンタ達になんか負けないわ!! わたしはミスター・サタンの娘なんだから!!」

ビーデルを支えるもの、それは亡き友との友情、そして亡き父が世界チャンピオンだったという誇りのみ。

それを聞いていた17号は表情もなく、手のひらを開く。

「なんだ、絶望しないのか。興ざめだな」

「——ッ!？」

そういつて17号はエネルギー波を放つ。

(そんな、何もできないままわたし、殺されちゃうのね……悔しい)

閃光に包まれる中、ビーデルは悔しさを覚えながら死を覚悟していた。

しかしビーデルが死ぬことはなかった。

「波つつつつ!!」

何者かが放ったエネルギー波によって17号のエネルギー波がかき消された。

(え、誰……?)

恐る恐るビーデルが目を開くと、そこには山吹色の道着を身にまとった、年齢的には自分に近いくらいの筋肉質な若者の背中が写った。

背中の中にマルが描かれ、そこには飯という一文字が刻まれていた。

「悟飯さーさーさーん!!」

さらにもう一人、自分よりも年下でまだ少年といった風貌の、髪が紫色の少年がどういいうわけか上空から降り立ったのだ。

そう、ビーデルは信じられなかった。

何故なら割って入ってきた二人は、空を飛んできたように見えたからだ。

「なんだ、孫悟飯とトランクスじゃないか。お前たちまだ生きていたのか」

「もう17号、アンタがモタモタしてるから邪魔者が湧いてきちゃったじゃないの」

二人の姿を見て、先ほどまで瓦礫に腰かけていた18号が立ち上がり、17号の横に並ぶ。

「トランクス、その人を連れてできるだけ遠くに離れてくれ」

「え、悟飯さん……嫌ですよ、オレも戦います!!」

「トランクス、命令だ!! 人命救助も立派な戦いさ、早く行くんだ」

「……は、はい!!」

青年に命令された少年が自分の前に駆け寄ってきた。

何かなんだか理解ができないビーデルだったが、少年は必死な面持ちで自分と向かい合う。

「……は危険です、オレと一緒に逃げましょう」

「あ、あなた達は……?」

「説明は後でします。さあ、オレの背中にしっかり掴まって」

ビーデルは一瞬躊躇したものの、少年がやけに必死であることや、自分を助けようとしていることは間違いなさそうだったため、少年の言う通りに背中にしがみついた。

「きゃあっ!?!」

するとビーデルは未知の体験をする。

なんと少年が空を飛んだのだ。

しがみついるのがやつとで、目を開けられないほどの猛スピードで、とにかく自分は助かった。

その事実を理解することが、ビーデルにとっては精一杯であった。

「人造人間!! 今日こそおまえ達を倒す!!」

そう咆哮し、悟飯は果敢にも二人の人造人間に挑んでいった。

これまで激闘を繰り返してきた悟飯の戦闘力は、初めて超サイヤ人に覚醒したあの頃よりも飛躍的に向上していたものの、それでもまだ人造人間二人を相手に勝てるレベルではなかった。

はじめのうちはある程度の善戦を見せるものの、17号と18号のコンビネーションは抜群に息が合っており、少しずつ悟飯は劣勢に追い込まれていく。

数分が経過した頃、悟飯はすでに怪我を負ってボロボロだった。

「はあ、はあ、はあ……っ」

「なるほど、どうやら少しは強くなったようだな」

「でもまだ全然弱い。それじゃあたし達には何度やっても勝てないね?」

「18号の言う通りだな。お前ほど無駄な努力が似合う奴はいないよ」

その時、悟飯が考えていたことはどうやって戦線を離脱するかだった。

悔しいが、まだ自分の力では人造人間に勝つことができない。

トランクスはまだ未熟、ここで散つては誰も人造人間を食い止めることも、トランクスを一人前の戦士に育て上げることもしかない。

なんとかして生き延びなければと悟飯は思っていたが、現状、人造人間に隙はない。

「さて、18号の機嫌を損ねてしまおうし、そろそろ殺すけどいいよな?」

「くっ!!」

悟飯は構えてみせるものの、正直ベストな状態で一對一ならまだわからないが、消耗した状態で二人を同時に相手にできない。

絶望的な状況、勝ち目など全くない。

「ん?」

だが状況は一つのホイホイカプセルによって激変する。

投げ込まれたホイホイカプセルから出てきたのは、大魔王封印というお札が張られた電子ジャーだった。

「悟飯よ!! この隙に逃げるんじゃ!!」

そして次に聞こえた雄たけび。

それはピッコロ大魔王と戦った時に着ていた黒いカンフースーツを着た亀仙人だった。

「む、武天老師さま!?!」

亀仙人が助けに来た。

だがそれば死ぬ気であるということ、悟飯はそれを感じ取り、焦った。

「逃げるんじや悟飯!! 人造人間を倒せるのはお主とトランクスしかおらん!!」

「武天老師さま……まさかっつっ」

「なんだ、この爺さんは?」

「17号、二人まとめてさっさと消しちゃおうよ」

二人が亀仙人から視線を切らし、見つめあって亀仙人を殺害することを確認しあった瞬間。

その隙を武術の達人である亀仙人は見逃さなかった。

(まともに挑んではワシの武術など奴らには通用せん……ならば手段は一つ)

両手を開いて、正面に構えた。

(悟飯を、トランクスをを、若者を、希望を死なせてはならん……そのためにこの老いぼれの命を使うのじゃ!!)

そして。

「まふうば魔封波じゃ!!」

緑色のエネルギー波のようなものが渦を巻き、それは瞬く間に17号の周囲を包む。

「なんだ……なっ、うあああああああああつっつっつっつ!!」

亀仙人ごときの攻撃など効かない。

そこら辺の雑魚と同じだと油断したことが、17号に大きな隙を生み、避けられたハズの魔封波の直撃を喰らう結果となった。

「なっ、17号!?!」

「武天老師さま!!」

弟が得体のしれない何かに巻き込まれ、18号が叫ぶ。

そして命を賭けた亀仙人の行動に、悟飯もまた叫んだ。

「逃げるんじゃ悟飯!! さっさと行けい!!」

亀仙人の咆哮。

それは固まっていた悟飯を突き動かすのには十分すぎた。

「武天老師さま……すみません、すみません!!」

悟飯はその場を飛び立った。

(すみません、すみません……仇は必ず取ります!!)

悟飯はただ、心の中で亀仙人に謝ることしかできなかつた。

あの技のことを悟飯はなんとなく、知っていた。

『悟飯、世の中には力の差など関係なく脅威となる技もある。覚えておくんだな、油断しているとかつて武泰斗という武道家に悪の大魔王が封印されたように、足元をすくわれろぞ!』

戦いでは油断は禁物ということを教えてくれた師匠であるピッコロが、かつて自身の父であるピッコロ大魔王を封印した技があつたことを教えてくれたことがある。

魔封波、恐らくそれがその技であろう。

悟飯は悩んだ。

亀仙人を手伝い、17号を封印した後、18号と戦うべきだつたのではないかと。

しかし万全の状態ならともかく、満身創痍の今の状態では18号一人だとしても戦って勝てる可能性は限りなくゼロに近い。

非情であり、後悔しかなかったが、それでも合理的な判断ではあった。未来へ紡ぐ。

それが最優先であり、悟飯は自分にとってそれが使命であると考えていた。

(悔しいけど、オレじゃアイツらには勝てない……)

このところ、悟飯は自分の力に限界を感じていた。

修行の日々だというのに、これといって実力の向上を実感できず、事実何度挑んでも人造人間には勝てない現実もあった。

だから悟飯は薄々感じ始めていたのだ——自分は人造人間には勝てないことを。

(だけどアイツらに僅かでも勝てる可能性があるとしたら……:トランクスだけだ)

しかし同時に悟飯は感じ取っていた。

ベジータが遺したサイヤ人の末裔、トランクスが秘めている潜在能力の高さを。

しかしトランクスはまだ子供、力も戦い方もまだ未熟だ。

(オレは死ねない。トランクスを一人前に育てるまでは……まだ死ねないんだ!!)

その想いが悟飯に強い決意をさせる。

亀仙人の想いを無駄にはしない、そう固く誓いながら悟飯はトランクスたちのもとへ

飛ぶ。

——この後、亀仙人は消息を絶った。

絶望への反抗!! 希望の種

「あ、悟飯さんだ!!」

潜伏先でビーデルの手当てをしていたトランクスが、悟飯の気を感じて表へ飛び出す。

「うう、トランクス……」

「悟飯さん!! 大丈夫ですか!? さあ中に入って、手当に必要な道具は揃えました!!」

それは都のハズレにある、半分倒壊した家屋だった。

恐らく家主は人造人間に殺されてしまったのだろう。長らく生活していた痕跡はなく、ゆえに気を探れない人造人間から襲撃を受ける可能性も低い。

力が抜けて頂垂れる悟飯を支え、トランクスは家屋の中に入った。

「あの、大丈夫ですか!?!」

すると先ほど救出したビーデルが悟飯に駆け寄ってきた。

「わたしも何か手伝います!!」

「……それなら悟飯さんの手当てを頼めますか? オレ、何か食べ物買ってきます」

「わかったわ、お姉さんに任せて」

「トランクス……気をつけろ、人造人間はまだ死んでいない」

「はい、大丈夫です。すぐ戻ってきます!!」

そういつてトランクスは食べ物を買に行く為、まだ人造人間の被害を受けていない都へ向けて飛んでいった。

家屋に残されたビーデルと悟飯。

戦いで傷を負った悟飯にビーデルは消毒処置や包帯など、慎重に手当てを行っていき。

「あの、助けていただいて本当にありがとうございます」

「え? いや、無事でよかったですよ」

そのやり取りの後、しばらく沈黙が続いたが、沈黙を破つたのはビーデルだった。

「あなたもあの子も空、飛べるんですね」

「え……ああ、うん。まあね」

「すごい、空なんて普通は飛べないのに。ねえ、あなた達なんですよ? 人造人間に抵抗を続けている謎の二人組っていうのは?」

色々鋭い子だなと悟飯は思ったが、事実なのでそれを否定はできない。

「はは、まあね」

「すごい……わたしのパパでも勝てなかったあんな奴らに立ち向かえるだなんて」

「そうか、君もお父さんを人造人間に……」

「あなたも?」

「いえ、オレの父は人造人間が現れる前に心臓病で亡くなりました。でもオレに戦い方を教えてくれた師匠も、オレやお父さんの仲間たちも、みんなアイツらに殺されて……ッ」

そう振り返っていると、悟飯の心の中で怒りが爆発しそうになる。

無意識のうちに体に力が入ってしまう。

「ピッコロさん、クリリンさん、天津飯さん、ヤムチャさん、チャオズさん、ヤジロベエさん、武天老師さま、ベジータさん……おのれ、人造人間め!!」

悟飯の心には鬼が宿っていた。

その慟哭をビーデルは黙って聞くことしかできなかつた。

しかし怒りに溺れかけていた悟飯は、体の震えを強引に抑えた。

「……ごめんなさい」

「いえ、仕方ないです。わたしだってパパを、そしてきつき友達を殺されました……」

「そうだったんですか……」

それに対して悟飯はただ、同情をすることしかできなかつた。

本当だったらこの手で人造人間を倒し、この子の無念を、そして自分を庇って散った

仲間たちの仇を討ってやりたい。

しかし今の悟飯にはその力が無かった。

「ねえ、あなた名前は？」

「オレかい？ 孫悟飯です」

「悟飯くんね、わたしはビーデル。あなた多分、同じくらいの世代ですよね？」

「オレは今年22です」

「やっぱり、わたし達同じ年だわ」

「そうか、オレ同年代の人と話をするの久しぶりだよ」

「そうなの？」

「昔から周りに同じ年代の人っていないなかったし、世間がこうなってからオレは修業と戦いの日々だったから」

なんとなく、ビーデルとの会話は悟飯にとって心地がよかった。

同い年の人と話すという今までそれほど経験してこなかった新鮮さもあるが、人造人間に親しい仲間たちが殺されたという共通点があり、手当が終わった後も悟飯とビーデルの話は止まらない。

「悟飯さん、ビーデルさん、戻りました!!」

それからしばらくして、トランクスが戻ってきた。

それから簡易的ではあるが、ガスコンロを使って三人で食事をとる。

その時間は悟飯にとっても、トランクスにとっても、そしてビーデルにとっても、久しぶりの安息といえる時間だった。

気づけば夜になっていた。

「悟飯さん、オレそろそろ帰らないと母さんが……」

「はは、そうだな」

「もう行っちゃおうの?」

「ええ、この子のお母さん、怒るとオレも手をつけられないから」

「そう……」

ビーデルはとても残念そうな顔をしていた。

それは悟飯の心を動かすには十分すぎる材料だった。

「ビーデルさんはここに住むのかい?」

「え、ええ……ほかに行くところもないし」

「だったらまた来るよ」

「本当!?!」

先ほどまでとはうってかわって、ビーデルは目を輝かせた。

「うん、約束する」

「わたし嘘つきは嫌いだからね、約束よ」

そう言つて悟飯とビーデルは握手を交わした。

(……悟飯さんもああいう照れた顔するんだ)

それはトランクスにとつても新鮮な光景だった。

「じゃ、また」

「うん、またね悟飯くん」

そして悟飯とトランクス、ビーデルは別れた。

後日、結局のところ人造人間は17号も18号も現れては街を破壊し続け、やはり亀仙人の魔封波は何らかの原因で失敗に終わったことが判明した。

そのたび、悟飯とトランクスは17号、18号との戦いに赴いた。

その合間、悟飯はビーデルに会いに潜伏先の家屋をたびたび訪れていた。

「悟飯くんの師匠つてどんな人だったの?」

「厳しくて孤高な雰囲気だけど、強くて頭がよくて、何より優しい人だった」

亡き師、ピッコロのことを思う。

(今、もしピッコロさんが生きていれば、オレはもつと強くなれていたかもしれない)

悟飯に戦いの基礎を教えたのはピッコロだった。

フリーザとの戦いが終わった後、悟空が心臓病で倒れるまでの間は悟空とも修行をし

たこともあるが、その時だってピッコロを交えて三人で修業をしていた。

そして悟空亡き後、ピッコロが戦死するまで悟飯に稽古をつけたのはピッコロだった。

師匠を失い、伸び悩む今だからこそ、悟飯は強く思うのだった。

——ピッコロさんに鍛えなおしてもらいたい。

もしかしたら自分はもう、実力的にはピッコロより上かもしれない。

それでも戦い方、戦いにおける心構え、伸び悩んだ時にすべきこと、それら自分に足りないものをすべてピッコロは熟知している。

しかし悔やんでもピッコロは帰ってこない。

「ビーデルさんのお父さんはどんな人だったんだい？」

だから悟飯は話を逸らした。

これ以上ピッコロの話をするとメンタルを保てないと思ったからだだった。

「ちよつとお調子者で、オマケにママが亡くなつて世界チャンピオンになつてからは修業を怠けてたけど、それでも正義感があつて強くて優しいパパだったわ」

ビーデルもまた亡き父との思い出を振り返り、思いを募らせるのだった。

「世界チャンピオンだったんだ」

「そうよ、あの天下一武道会でも優勝したことがあるんだから」

「天下一武道会か……オレの父さんも昔、出場したことがあるって言うていたよ」
「悟飯君のお父さん？ 孫悟飯、孫……もしかして孫悟空って人かしら？」

やっぱりこの子、鋭い。

見事なビーデルの回答に、悟飯は何も答えることができなかった。

「その反応、やっぱりそうなのね!!」

「え、ええ、まあ……」

「やっぱり。今時苗字と名前が分かれているのは珍しいからね」

なるほど、そういうことか。

理由を聞いて悟飯は納得するのだった。

「その孫悟空って人はやっぱり相当強かったのかしら？」

「うん。お父さんはすごく強かった、今でもオレはお父さんには敵わないと思ってる」

「悟飯くんが敵わないの!?! そんなに強い人ならどうして前回の天下一武道会には出な

かったのかしら……わたしのパパとの戦い、ちよつと見てみたかったわ」

第24回天下一武道会。

それは確か人造人間が出現する直前の大会だったハズだ。

「……お父さん、その時にはもう病に侵されていたんだ」

「え……ごめんさい」

「いいんだ、仕方ないことだからね」

失礼なことを聞いてしまったとビードルは申し訳がなくなる。

しかし悟飯に笑って許された後、彼女は悟飯に対して何かを感じていた。

ともに偉大な父を持つ者としてのシンパシーを。

「悟飯くんはやっぱりお父さんみたいな強い格闘家になりたかったのかしら?」

「いや、オレ本当は戦うのが嫌い……実は学者になるのが夢だったんだ」

「学者さん!?!」

「うん。でも小さい頃から色々あったし、ようやく平和になって勉強に身を入れ始めたころには人造人間が現れたからね。多分、もうオレの夢は叶うことはないんだろうな……」

そう語る悟飯は遠くを見ていて、その表情はどこか寂しそうだった。

「……わたし、まだ夢を諦めるのは早いと思うわ」

「え?」

「だって人造人間を倒せば、その後は平和が来るじゃない。人造人間を倒して平和になったら学者を目指せばいいのよ」

そんな風に言ってくれる人はビードルが初めてだった。

人造人間、倒せるかどうかはさておき、自分の潜在能力に期待した仲間たちは自分が

強くなることを望んできたし、こういう世の中になってからは自分しか戦えるものがないから、その夢自体を完全に諦めていた。

しかし心のどこかで、もし勉強を続けていたらという後悔はあった。

「わたし達、まだ22よ？ 夢を諦めるなんてまだ早いと思うの」

「……そうだね、ビーデルさんの言う通りだ。オレは勝手に諦めていた」

夢くらいはあつていいのかもしれない。

それを戦うためのモチベーションにしているのかもしれない。

悟飯はほんの少し、ビーデルに心を救われた気分になった。

「ありがとう、ビーデルさん。オレ、人造人間を倒して平和になったら学者を目指すよ」

そう言いながら悟飯は立ち上がった。

次の瞬間だった。

『臨時ニュースです!! 人造人間が——』

それは人造人間の襲来を伝えるラジオのニュースだった。

「——ッ!! おのれ人造人間め、今度こそ倒してやる!!」

悟飯はそう叫びながら表に飛び出し、気を解放する。

「はあああああッ!!」

超サイヤ人に変身し、神々しく輝く悟飯にビーデルは目を奪われる。

だが一言、どうしても悟飯に言っておきたいことがあった。

「悟飯くん、気を付けてね。危なくなったら逃げるのよ」

「ああ、わかってる。今度こそ人造人間を倒してみせるさ」

そう言い残し、悟飯は飛び立った。

「ビーデルは悟飯を見送り、そして悟飯の無事を、悟飯の勝利を祈ることしかできなかった。」

——それから幾日が経過したのでろう。

いつも自分に会いに来ていた悟飯が、この日を境にパツタリと音沙汰がなくなった。

ビーデルは不安な気持ちに苛まれるが、悟飯の無事を祈り続けた。

それからさらに一週間が経過して、ビーデルは何者かの気配を家の外から感じた。

それが直観的に悟飯だと思い、ビーデルは走って家から飛び出した。

「悟飯くん!! ……………え」

それは確かに悟飯だった。

だが悟飯の姿を見た瞬間、ビーデルは息を呑むこともできなくなる衝撃を受けた。

「こんにちは、ビーデルさん」

いつものように笑顔で挨拶をしてくれる悟飯だったが、彼の左腕が無い。

道着の裾がヒラヒラと舞い、本来左腕がある所には何もなかった。

さらに以前にもまして顔に傷跡が増えている。

あの日、飛び立った後、悟飯は人造人間との戦いで左腕を失う重傷を負い、その療養のために自分に会いにこれなかったことは明白だった。

ビーデルは胸が締め付けられるような感覚に苛まれ、大粒の涙を流した。

「うわああああああ!! 悟飯くん!!」

そして感情を抑えられなくなり、悟飯に泣きわめきながら飛びついた。

「お願い!! もう人造人間と戦うのはやめて!!」

「び、ビーデルさん?」

「これ以上戦ったら悟飯くんが死んじゃうわ!! もういいの悟飯くん、一人で背負わなくても……アイツらに勝てるやつなんかない。だからもう悟飯くん、アイツらと戦っちゃダメ。悟飯くんにまで死なれたら、わたし、わたし……っ!!」

嗚咽し、ただひたすら悟飯にしがみつくビーデル。

そんなビーデルを、悟飯はそつと優しく残った右手で抱き寄せる。

「ビーデルさん、ありがとう……でもオレは戦うよ」

「そんな!? 今度アイツらと戦ったら、悟飯くんが……っ」

「それでもオレは戦わなくちゃいけない。何度も地球を救ってきた孫悟空の息子として、オレを庇って散っていった仲間たちのためにも、人類の未来のためにも、そして君

のためにも……」

この時点で悟飯は悟っていた。

左腕も失ってしまい、もう自分の力では人造人間には勝てないことを。

だからこそ悟飯は託す選択をしようとしていた。

未来を守る戦士として、トランク스에未来を託そうと考えていた。

ゆえに悟飯はもう、死ぬ気だったのかもしれない。

それでも自分のために献身的になってくれたビーデルを悲しませたくはない、ビーデルのためにも人造人間を倒して平和な世界を手に入れたい。

それは叶わないかもしれない。

今日ビーデルと別れば、それは今生の別れになるかもしれない。

それでも地球のため、トランクスのため、ビーデルのため、戦う事はやめられない。

「必ずアイツらを倒す、その日までオレは死ねないんだ」

だからこの言葉は残酷な嘘になるかもしれないけど、決意として語らねばならない。

悟飯の腕の中で、そのことを察したビーデルは涙目ながらも悟飯を見つめる。

「わかった……でも悟飯くん、今日は帰らないで欲しい」

「ビーデルさん……わかった」

そんなビーデルを、悟飯は放っておくことができなかつた。

もうビーデルは悟飯にとって大きな存在になっていた。

それはビーデルにとっても同じ、もう悟飯は大切な存在になっていた。

——それから悟飯とビーデルは共に一夜を明かした。

そして翌朝。

「悟飯くん、本当に行っちゃうの?」

「うん、トランク스에 稽古をつけてやらなきゃ」

「悟飯くん、また会えるわよね?」

薄々悟ってはいる。

それでも確認して、言葉にすることで安心したのかもしれない。

「また会いに行く、約束するよ」

悟飯もビーデルの心情を察したのか、それはもう彼にとって優しい嘘なのかもしれない。

い。

「じゃ、行くね」

「悟飯くん、絶対よ!! 必ずまた会いに来て!!」

それに対し、悟飯は指で合図を送ってから高速で飛び立った。

(悟飯くん、わたし信じているから……)

悟飯の無事を祈るビーデル。

は止まることなく、ビーデルは嗚咽した。

最愛の人を亡くした悲しみは、計り知れないものだった。

そんなビーデルをトランクスは、ただ見守ることしかできない。

しかしトランクスはビーデルの傍から離れなかった。

そしてビーデルが少し落ち着きを取り戻してきたところで、トランクスは口を開いた。

「……悟飯さんの仇は、いつかオレが必ずとります」

そう言いながらトランクスは超サイヤ人に変身する。

あの日、覚醒した超サイヤ人にはもう既に自由に変身できるようになっていた。

「何年かかっても必ずアイツらを倒す。ビーデルさん、それまで必ず生き延びてくだ

さい」

「トランクス君……」

光り輝くトランクスの姿が眩しい。

そしてそれはビーデルにとって、微かな希望を与えた。

「人造人間を倒したら、オレまたここに来ます」

「トランクス君……わかったわ、悟飯くんの……悟飯くんの仇を討って!!」

その声に、トランクスは親指を立てて答えた。

こうしてトランクスは悟飯の意志を継ぎ、人造人間を倒すために過酷な修行を繰り返した。

——そして四年後。

トランクスはあのころの悟飯に近い実力を身につけていた。

だがそれでも経験不足からか、悟飯ほど人造人間に善戦はできなかった。

そして先日、人造人間に手痛く返り討ちに遭ったばかりだった。

「母さん、オレのほうはもう準備は大丈夫です」

カプセルコーポレーションの敷地内にて、成長したトランクスは剣を背負い、タイムマシンに乗り込もうとしていた。

それを母、ブルマが見守っていた。

「トランクス、設定した日付はフリーザが来る日だわ。一応気を付けて行くのよ」

トランクスは希望を求め、過去へタイムマシンで行こうとしていた。

日付はあの日、フリーザがコルド大王と共に地球へ襲来した日だった。

「わかってます。それじゃあ母さん、行ってきます」

「頼んだわよ、トランクス」

タイムマシンに乗り込んだトランクスは、機器を操作しながら振り返る。

（悟飯さん、必ず人造人間を倒してみませす。そして……ビーデルさん。オレはあなた

が生きていると信じています。いい報告ができるまでまだかかりそうだけど……待っていてください。絶対に悟飯さんの仇を討って、約束を果たしますから。

それがトランクスの決意だった。

そしてここからトランクスは過去で孫悟空、そして父ベジータと出会い、人造人間の二人やセルとの過酷な戦いに突入していくのだった。

——そして。

絶望への反抗!! 受け継がれし戦士たち

それから三年余りの月日が流れ、ついにその時が訪れた。

「はあああツツツ!!」

眼前に迫るトランクスを、それが18号にとつて最期に見た光景だった。

トランクスの手から放たれた高威力のエネルギー波は、18号を跡形もなく木っ端微塵に吹き飛ばしてしまったのだ。

僅かな残りカスが降り注ぐのを前に、17号が目を見開いて固まった。

「ま、まさか……お前……ときに、18号が……ツ!？」

「今のは殺された仲間たちの分だ……そして今度は悟飯さんの仇だ!!」

迫りくるトランクスを前に、17号は慌てて構えをとった。

だが過去、精神と時の部屋でベジータとの過酷な修行を耐え抜き、究極の人造人間であるセルとの戦いを経て大幅にパワーアップしたトランクスにとつて、もはや17号など敵ではなかった。

激しい蹴りで吹き飛ばされた17号は、そのまま地面へ叩きつけられる。

仰向けになり、大の字になって倒れる17号。

ダメージは甚大で、人間ベースゆえに彼を襲う痛みによって17号は動けなくなつた。

「消えろオー………ッッ!!」

そこへ容赦なく放たれた、トランクスエネルギー波。

それは先ほど18号へ放つたものより高い威力を秘めており、17号をは細胞一つ残さずこの世から完全に消滅するに至つた。

トドメを刺したことを確認し、トランクスは倒れていた老人を介抱する。

(終わつた……いやまだだ、まだ肝心なヤツが残っている)

この時代にはまだセルは現れていない。

しかし17号と18号を倒したのだ、必ずタイムマシンに乗るために自分の所に現れる。

それまでトランクスにとって、油断ができない日々が続くのだ。

——そして半年後。

「完全に消えてなくなれ、セル!!」

「ちくしょう!! ちくしょうおおおおおおおおお………」

カプセルコーポレーションにて、トランクスを襲撃しようとしたセルは、トランクスに荒野へと吹き飛ばされた後、一方的な展開の戦いによってセルは細胞一つ残すことな

く消滅。

完全体のセルは確かにすさまじい強さだった。

しかし第一形態のセルならば、トランクスにとつてもはや敵ではなかったのだ。

(これで、すべてが終わりました……ありがとう悟空さんたち……)

ついにトランクスは人造人間17号と18号を倒し、そしてセルをも倒した。

(悟飯さん、これで世界は平和になりました……)

それはつまり悟飯の敵討ちを、そしてビーデルとの約束をやり遂げたという意味だった。

充実感を胸に、トランクスはカプセルコーポレーションへと戻る。

人造人間の撃破から半年、都市部では復興が始まり、街は少しずつ形を取り戻していた。

空を飛びながらその様子を、トランクスは満足げに見つめる。

「そうだ、母さんのところに戻る前に用事があったな」

ふと思いついた悟飯は、オレンジシティの方角へと飛行する。

オレンジシティも復興が始まり、人口は激減したものの再び都市を形成しつつあった。

その郊外、離れた場所にまだその一軒家は建っていた。

「懐かしいな……ついにここに来る時が来た」

初めてこの家に入入りした頃と比べて、その一軒家は小奇麗に修復されていた。

それはこの家に人が住んでいることの証であった。

トランクスは家のインターホンを鳴らす。

「はい……あなたは?」

お互い、あの頃と比べて容姿は変わっていた。

まずトランクスはあの頃、まだ小柄な少年であった。しかし今のトランクスは年齢と共に体も成長したことに加え、精神と時の部屋で修業した影響から、実年齢よりも背が高く、筋肉質で逞しい青年に育っていた。

そしてビーデルもまた、髪型がショートボブに変わったこと以外にも、年齢を重ねてより大人の女性らしい気品ある美しい女性に変貌を遂げていた。

それでも再開した直後、お互いの顔を見てあのころの面影を感じる。

「お久しぶりです、ビーデルさん」

「トランクス君!?! あなた随分大きくなったわね……」

「まあ、あれから何年も経ってますし……それより今日は報告です。オレ、人造人間を倒すことができましたよ」

そう答えるとビーデルは満面の笑みを浮かべ。

「ええ。ニュースで知っていたけど、直接それを聞けて嬉しいわ」

「はい。オレ、悟飯さんの仇、取りましたよ」

「ありがとう、トランクス君……そうだ、上がってちょうだい。あなたに是非会わせたい子がいるのよ」

それを聞き、トランクスは若干困惑するものの、せっかくの厚意と積もる話もあるので家にかかることを決めた。

玄関を見ると、そこでトランクスは違和感を覚える。

(……子供用の靴? ビーデルさん以外にももう一人、子供が住んでいるのか?)

それは明らかにビーデルよりも足が小さい、子供用の靴だった。

それも淡いピンク色で、色合的には女兒用であることは間違いない。

「パンちゃん、お客さんが来たわよ」

居間へ通され、ビーデルがパンという名を呼ぶ。

そして居間を見たトランクスは仰天した。

——まだ幼い小学生くらいの女の子が居た。

その子はミディアムくらいの長さの黒髪で、ビーデルをうんと幼くしたような風貌の可愛らしい女の子だった。

ビーデルの子であることは間違いないさそうだが、その時トランクスは気づいた。

彼女が発する気が、トランクスをよく知る人物にそっくりだったからだ。

「ま、まさかこの子は……!?!」

「悟飯くんとわたしの子よ」

やっぱり、自分の予想は正しかった。

しかしそれにしつってトランクスにとつて、それは大きな衝撃だった。

なんと自分の師匠であり、兄貴分であつた悟飯に娘がいたのだ。

「こんにちは、パンです」

「あ、どうも。トランクスです」

パンはペコリとお辞儀をして、それに対してトランクスも慌ててお辞儀を返す。

「パン、この人はあなたのパパのお友達なのよ」

「パパの?」

「そうだよ。悟飯さん……。パパはオレの兄貴分だったんだ」

そう答えると先ほどまで恐る恐るといった感じだったパンだったが、トランクスに対する警戒を解いたのか、リラックスした様子でソファアに座つた。

それからビーデルは紅茶を淹れ、トランクスとたくさん話をした。

悟飯の死後、パンが生まれた時のこと。

タイムマシンで過去へ行き、過去で悟飯の父・孫悟空や自身の父・ベジータと出会い、

修行を経て大幅なパワーアップを遂げたこと。

過去でセルという化け物と戦い、最終的に過去の悟飯がセルを倒したこと。

パンは順調に成長しており、この春から学校に通い始めたこと。

「そうなんだ……そっか、過去では悟飯くんがそんなに強くなったのね」

「はい、あのほとぼしる力は今まで感じたことがないものでした」

するとビーデルがカップを置き、思い更けた様子でカップの中の紅茶を見つめる。

「過去のわたしは、悟飯くんと出会えるのかしら」

それを聞いたトランクスはとてもやさしい笑みを浮かべた。

「……今のあなたが悟飯さんと出会って、パンちゃんが生まれたように、きっと過去の悟

飯さんも過去のあなたと出会うはずですよ」

根拠はなかった。

ただ悟飯とセルとの戦いは途中までテレビ中継されていたはずだ。

その内容はミスター・サタンの邪魔者という形で紹介されていたものの、それでも悟

空や悟飯が繰り広げたすさまじい戦いの様子は全世界に中継されたはず。

きつとそれを見た幼いビーデルは、悟飯のことを認識しているに違いない。

そして根拠はないけど将来、悟飯とビーデルは何処かで出会うはず。

この時代で悟飯とビーデルが偶然出会ったように、きつといつかは出会うはず。

トランクスはそう信じていた。

「そうよね。過去のわたしと悟飯くんのこと、応援しなくちゃね」

それを聞いたビーデルも、どこか満足そうな表情を浮かべた。

「ねえママ、今日のご飯はなに？」

「パン。そうね……トランクス君、今日は夕食と一緒にいかが？」

「え？」

「トランクスくんも一緒に食べるの？」

「……そうですね、いただいています」

ふと、トランクスはパンを見ながら思うことがあった。

それを切り出すタイミングは食事時がいいと思い、夕食をこちそうしてもらおうことにした。

それは人造人間を倒してまもなくのことだった。

——母さん、チチさんと牛魔王さんはまだご存命なんでしょうか？

——ええ？ そうねえ、多分チチさんと牛魔王さんは元気だと思うけど。

——そうですね、チチさんと牛魔王さんはパオズ山に住んでいますかね？

——どうかかしらね。最近連絡が取れていなかったから……でも孫くんや悟飯くんとの思い出が詰まったあの家から、チチさんは引越さないと思うわよ。

そんなやり取りをした覚えがある。

その時はチチや牛魔王にも、過去で何があったのかを直接説明したいと思っていたが、今はそれ以上に大事な用事ができたとしてトランクスは思っていた。

それは言うまでもなく、パンのことである。

(パンちゃんは悟飯さんが遺した一人娘……つまりチチさんや牛魔王さんにとって、かけがえのない肉親なんだ。パンちゃんとチチさん達は絶対に会わせなきゃダメだ)

思いがけず悟飯の子が発覚した。

これはトランクスにとっても朗報だったが、自分よりもっと喜ぶ人たちがいるはずだ。

二人の架け橋になることができるのは自分だけ。

「……あの、ビーデルさん」

「なにかしら?」

「実はビーデルさんとパンちゃんにどうしても会わせたい人がいるんです」

「ええ、誰かしら?」

「実は……多分ですけど、悟飯さんの母親と祖父、つまり戸籍上はビーデルさんの義母にあたる方がまだ存命のはずでして、オレその人たちが何処に住んでいるのかを知っています……」

それを聞いたビーデルのフォークが止まる。

自分の義母、そしてパンの肉親が生きているかもしれない。

「ほ、本当なの？、それ？」

「まだこの時代で会っていないので確実とは言えませんが、パオズ山が人造人間に襲われたという話は聞いていませんし、恐らくまだ二人とも元気だとオレの母さんも言うてました」

固まるビーデル。

ビーデルとトランクスを交互に見つめるパン。

そんなパンの頭をビーデルは撫でてから、ビーデルは真剣な面持ちでトランクスに向き合う。

「トランクス君、ぜひお義母さんたちに会わせてくれないかしら？」

「もちろんです。パンちゃんの学校が休みの日、ぜひ」

それからの話はトントン拍子で進んだ。

「私も行くわ。チチさんはアンタのことは赤ちゃんの頃しか知らないし、私は直接チチさんと面識があるから」

ビーデルとパンが孫家へ行く日には、ブルマも同行することになった。

確かに過去ではチチとトランクスは会っているが、この時代では成長してからトラン

クスは一度もチチに会っていない。

その状態でいきなり行くのはリスクがあることも事実だった。

それゆえ、トランクスとしてはブルマの同行は非常に助かるものだった。

——そして当日。

ブルマが操縦するジェット機でパオズ山へ飛ぶ。

着陸すると、そこにはあのころから変わらない。ただ少し外壁が老朽化したように見える孫家が建っていた。

「なんだべ?」

飛行機が飛んでくるとも珍しいからか、その音に気付いたチチがドアを開けて出てきた。

悟空、そして悟飯の死を経て、心労も崇ってかチチの髪には白髪が混じり、皺も多くてかなり老け込んだ様子だったが、これで健在が確認された。

飛行機から降り立ったブルマが、手を振りながらチチに近づく。

「チチさん、お久しぶり」

「あ!! ひよつとしてブルマさんだか!」

「そうよ、久しぶりよね。悟飯くんが亡くなって以来かしら?」

「いやあブルマさんは相変わらずだべ!! おらなんか悟飯ちゃんが死んじまってもう何

もやる気がなくなっちまって、すっかり老け込んじまって……」

そう語るチチの姿は、トランクスが過去で見た若いころのチチと比べても、弱弱しくて小さく映った。

「こんにちは、チチさん」

「あれ、おめえは……」

「聞いて驚くわよ？ この子トランクスなのよ」

「ええ!! と、トランクスだか!？」

「はい、僕トランクスです」

チチの記憶の中にあるトランクスはまだ赤子だった。

そのトランクスが見違えるほど遅く、そして優しげな青年に成長していたのだ。

「なんだベチチ、いったい……おお、おめえたつは!？」

「おつ父!!^と ブルマさんとトランクス君だよ!!」

「おお、これはこれは!! それにしてもトランクス、おめえほんとデカくなったなあ!!」

「どうも、牛魔王さん」

牛魔王も大柄な体格は相変わらずだが、髪は完全に白髪になり吹けた様子だった。

年齢的にはチチは悟空と同じ年で、ブルマよりも年下だが、やはり悟飯の死がよほど精神的にきてしまったのだろうか、こうして並ぶと父である牛魔王以上にチチが老け込

んだ印象だった。

そんなチチだが、ブルマとトランクスの横に並ぶ妻子に気づく。

「あれ、おめえたちはいったい……?」

「ふふふ。チチさん、聞いて驚くわよ?」

「今日はこの人たちをお二人に会わせたくて来しました」

「この二人とだか? おめえたちは……」

状況が理解できていないチチを見て、ビーデルは礼儀正しくお辞儀する。

「はじめまして、わたしはビーデル。孫悟飯さんと生前、お付き合いさせていただいてました」

「え、ええ!? 悟飯ちゃんとか!?」

「じゃ、じゃあおめえさんの横にいるその女の子は……」

「はじめまして。ばあちゃん、ひいじいちゃん。パンです」

「ばあちゃんて……お、おめえ、まさか………つ」

パンが元気よく挨拶をする。

そのワードにチチは狼狽えた。

現実だとは思えなかったからだ。

そしてビーデルはついに打ち明けるのだった。

「この子はわたしと悟飯くんの子供です」

「そういうこと。つまりこの子はチチさんにとってお孫さんってことなのよ」

それを聞いた瞬間、チチの体がわなわなと震える。

「うわあああああああああああー！ー！！」

そして大粒の涙を流しながら、チチはしやがんでパンのことを抱きしめるのだった。

悟飯の死後、涙さえ枯れてしまったかのようなほど無表情なチチだったが、悟飯が遺した自分の孫との出会いに、チチの中で様々な感情が渦巻いて、ただひたすら泣くことしかできなかつた。

ただこれだけは間違いなかつた。

——パンのことが愛おしかつた。

悟飯が遺してくれた、たつた一つの宝物。

その事実だけでチチにとっては十分だった。

「ばあちゃん、どうしたの？」

「うう、ひつぐ……パン、おめえ、生まれてきてくれてありがとう」

「ばあちゃん、ちよつと苦しいよ？」

「うう、悪かつただ。ビーデルさん、おめえも……」

「うう、うわあああ！！」

そう言つてチチが腕を広げると、ビーデルも父の胸に飛び込んだ。

この子がいたからパンが生まれた。

この子が悟飯と出会つてくれたから今がある。

そしてビーデルにとつてもこの出会いは特別だった。

——それからチチとビーデルとパンは三十分近く抱き合つた。

「うう、よかつたわね。本当に……」

「はい……!!」

それはブルマさえも涙を浮かべ、トランクスも目頭が熱くなつた。

それからしばらくして、落ち着きを取り戻した一同は家の中へ通される。

そして二つの写真が並んでいる部屋へ案内された。

「悟飯くん……」

「悟空さ、この子はおらたちの孫だべ。悟飯、おめえに娘がいただよ」

そう言いながらチチは写真に向かつて手を合わせた。

「悟飯くん、やつとあなたに報告ができたわ……」

ビーデルもまた手を合わせた。

「悟飯さん。オレ、もつと強くなります。これから先、どんな奴が現れても負けないくらい強くなって、悟飯さんが遺してくれたこの光景を必ず守ります……!!」

トランクスもまた、手を合わせて強く誓いを立てるのだった。

それからは積もる話がありすぎて、あつという間に夜になってしまった。

「お義母さん、わたしたちここに引越そうと思うのですが……」

「ああ、そうしてくれ。おらたともおめえたちと一緒に暮らしたいだ」

それからビーデルとパンが孫家で暮らすようになったのは、わりと直近のことだった。

そしてパンは転校することなく、悟空が遺した形見である筋斗雲に乗って今まで通っていた学校に通い続けるのであった。

そしてブルマはカプセルコーポレーションの代表として、人造人間たちにめっちゃくちゃにされた街の復興を、自社の製品や科学分野から支えることになった。

そしてトランクスはブルマの後継者として、経営学などを学びながら修行を続けた。セルを倒した悟飯のような圧倒的な強さを手に入れ、平和を守っていくために。

——そしてこれは後に判明することだが、意外な人物たちも生存していた。

「カリン様のおかげで今日もうめえ飯が食べれると思うと、泣けてくるがや……」

ヤジロベーはカリン様が最後の仙豆を与えたことで、命からがら生き延びたのだった。

そんなヤジロベーの生存が発覚し、後の戦いで役に立つことになるのは先の話。

——さらにこの男も生き延びていた。

「ほう、トランク스가人造人間を倒しおったか。しかしワシ、魔封波に失敗してあの場で気絶してしまったものの、奴らが人造人間だからかまさか生きながらえてしまうとは。亀やウーロンたちはワシが死んだと思ってるんじゃないやろうな……やれやれ、今更のこのこ帰れんのう」

実はあの日、電子ジャーを18号に破壊され、魔封波は失敗していた。

そして亀仙人はその場で気絶して倒れたのだが、亀仙人が死亡したと思った17号と18号によりトドメは刺されなかった。

結果、亀仙人は生き永らえた。

ピッコロ大魔王と違い、彼らは人造人間だからか、エネルギーの大幅な消耗はあつても死に至るほどの消耗はしなかったわけだ。

運よく生き残ってしまった亀仙人は、大口をたたいてカメハウスを出た手前、なかなかカメハウスに帰ることができずにいた。

そんな亀仙人の生存が発覚し、ウミガメたちと再会を果たすのはまだ先の話。

——そして時は流れ。

「まさかダーブラまで配下にしていたとは……ッ!?!」

「安心してください、界王神様。パンちゃん、バビディを頼んだ」

「わかったわ。トランクス、あんな変態そうなヤツやつつけちゃってよ!!」
——トランクスたち、次世代の戦士たちの戦いは続くのである。